慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	六地蔵寺法寶蔵典籍について
Sub Title	
Author	阿部, 隆一(Abe, Ryuichi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1966
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.5 (1966.) ,p.345- 379
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000005-0345

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

六地蔵寺法寶蔵典籍について

阿部隆一

沿革と現状

六地蔵寺は、水戸市郊外、水戸市から大洗に通ずる街道に沿った、茨城県東茨城郡常澄村字六反田にある、真言宗の寺院である。六地蔵寺の名が水戸附近で有名なのは、同寺安置の六地蔵が古くから安産育児の地蔵として親まれ、今日でも界隈から参詣者が絶えないからである。「六地蔵寺」の寺名は、古くは「六蔵寺」と言われたが、何時頃からか「六地蔵寺」と称され、また開山・建立の年月も確かでない。後述するこの寺の第三世の恵範上人が活躍したのは、明応・天文年間の戦国時代であるから、その開山は室町前期とみなすべきであろう。しかし、寺蔵の「延文三年（一三五八）十月二十三日大掾代左衛門尉右貞寄進状」を始めとする吉野時代の古文書数通には、六段田村地蔵堂に田畠を寄進し奉る旨が記してあるから、寺院とはゆかぬまでも、六地蔵を安置した御堂は既に吉野時代に建立されていたことは明かである。

六蔵寺に貴重な典籍が多数蔵されていることが、一部の学者に知られたのは、はやくも江戸時代も前期からである。智積院に於て、新義真言宗の宗義を大成した頼瑜上人の主著たる「大日経疏愚草」を校訂して承応三年刊行したが、その巻末の尊宣の跋文に

根嶺廃圮已来、此書磨滅不行于世者久矣、少有全本也、聞常州水戸六蔵寺書庫有具本、因千里懇請借将来焉、其本亦蠹損頗多矣、由此広探諸方、或二三策、或七八軸、類聚成数部、於是数子者往復校訂、略得為全本、遂使寿梓

とある。これによると博捜に力めても完本は六蔵寺本より外なかったらしい。このように六蔵寺本が中央の本山に知られるに至ったのは、六蔵寺第八世住職から、後に徳川家康の知遇と推挙を受けて、本山の能化職に補され、慶長十八年長谷寺小池坊に移住した宥義によってであろう。

六蔵寺経蔵に注目して、その保護保管に力を用いたのは、義公徳川光圀である。義公が六蔵寺に遊び、「遊六地蔵寺戯題垂糸桜花」と題して賦された詩は「常山文集」巻十一に見られる。公は工費を下附して、境内に書庫用の土蔵を建てしめた。この庫には公の帰依の深かった明の帰化僧心越禅師の筆になる「法宝蔵」なる額を掲げた。蓋し公の命によるものであろう。この額は今は移して本堂内陣に掲げてある。さらに、公は後述の如く、恵範撰「倶舎頌疏心車鈔」以下五部の書に修補を加えて、別に一通を写して、副本に備えせしめた。この義公の副本には、各冊毎に、六地蔵寺廿代の住沙門宥密が撰した延宝二年の跋文を附し、それには該本の成立と義公が之を謄写せしめた趣意を述べ、書写僧の名が記されてある。跋文の末尾はいづれもほゞ同趣旨の文で、曰く、

歳月大積、世代杳遠、文字蠹蝕、古本将朽、弊螻蟻之力、不能繕写、隠憂有茲矣、方今　水戸参議源公、好古起廃、黜邪挙正、恐此書之湮滅、而辱賜工費若干金、修補之、且別写一通、以備副本、嗚呼夫、恩恵崧高、功徳海深、我徒之幸、詎庸加旃、若後世待其人、而伝之、擴而充之、則豈翅我徒之幸乎、寔是天下之大幸也、欣歎之餘、書之巻尾、庶幾使後人均蒙観感之化、云爾（大疏指心抄心車跋）

と。ちなみに、明治になって法宝蔵の土蔵が大破して修復の費用に苦しんでいた際、明治四十二年修繕の手を加えた処、偶然床下から屢長小判三十枚、他の小判六枚を発見して、これを以て完全な修復を竣工することができた。此も義公の深慮より出る所と云われる。

その後六蔵寺本が仏徒以外の一部の学者に漸次知られるようになったのは、彰考館の史官がこの蔵本を利用したことによるものであろう。彰考館には今も六蔵寺本に基く転写本が蔵されている。しかし、当時の学界が常州六蔵寺本を記憶にとゞめるに至ったのは、「神皇正統記」と「常陸国茨城郡六段田村六地蔵寺過去帳」との二部が「羣書類従」に収録されたからである。類従本神皇正統記の奥書は

明徳五年甲戌三月十二日於坂本田中宿所書写畢点校了輙不可流布之敢不可処聊爾者也　法橋春全四八判

大永八年戊子六月廿三日書之　恵潤廿三歳

右神皇正統記以常陸国六段田村六地蔵寺本書写校合

この恵潤とは前記の恵範の弟子で、六蔵寺第四世の住持になった。「過去帳」には彰考館総裁立原翠軒の跋文が附してある。立原家は六地蔵寺の檀家で、墓所も同寺にあり、この「過去帳」は翠軒が自ら箱書を記して寄進した箱に現在も納められ、翠軒は他にも書籍や古琴を寄進している。塙保己一と翠軒との交友関係を考える時、六地蔵寺本が羣書類従に収録された経緯は自から明かであろう。

明治に入って、六地蔵寺も廃仏棄釈の巨浪を免れなかった。三十石の朱印状も空に帰して廃寺となり、本堂は民間に払い下

げになるという危殆に瀕した。この危機に際し、廿五歳の青年僧興範は一人たって、寺院再興の志を起し、明治六年、五穀を断って木食し、大般若経六百巻書写の願を発し、日夜奔走して僅か一年にして、本堂と田地全部を買い戻して、寺院存続の基礎を固めたが、不幸翌七年秋享年廿有六を以て夭逝した。その後人現われず、寺は無住或は兼務住職という不幸が長年続いて大正に至った。経蔵は寺運と興廃を共にする。寺の荒弊につれて、典籍の損爛や寺外流出も免れ得なかった。この寺外流出とは図書を売却したというわけではない。学者が訪れて、図書を閲覧し、檀徒総代の許可を得て寺外に帯借して、悪意からではなからうが、そのまゝ返却せずに、終に行方不明になり、或は相当数の寺本が某所に借り出されたまゝにあって、今次の戦災で失われたとも聞いている。図書の閲覧者は僧侶ではなく、在家の学者であったから、寺外に流出して人災を受けたのは、古来有名な神皇正統記を始め外典の本が殆どで、法宝蔵の約二千冊の聖教類は顧みる人もなく、書庫に放置された。大正十二年本堂は祝融の災で烏有に帰したが、書庫と地蔵堂は災厄をのがれ、大正十四年本堂の再興建立は成就を見た。

その頃、前東京帝国大学教授平泉澄博士は群書類従本「神皇正統記」の原本調査の宿願を果さんがため、大正十五年の秋十月、国史学科の水戸修学旅行の際に六地蔵寺を訪門された。以下博士の文を引用しよう。

それは十月の末二十八日でありました。十月といっても雨が降れば寒く、鹿島から乗った乗合自動車に長い間わびしくゆられて、六蔵寺へついたのは、日の暮れ方でありました。そして初めて見る六蔵寺の、廃頽零落の状に心を痛めながら、本堂へ参りますと、住職初め檀家総代の人々が集って、我々の為に本箱の掃除中でありましたが、その本箱の数多い事と、本といふ本が殆んど皆中世の古写本又は古版本である事とには、衷心驚いたのであります。これほどまでに多くの古書が空しく庫中に埋れて全く世間から忘れられてゐるといふのは、実に不思議といっていゝ事であります。そして私の目的とする神皇正統記は、その所在を失ってゐるといふのであります。

その夜水戸の宿に於いて私の考へたのは、この機会に出来るだけ神皇正統記も捜索し、又他の古書もいかなるものがあるか調査をしたいといふ事でありました。よって翌日僅か一時間の余裕を以て再び六蔵寺を訪ひ、一行十二名の学生諸君と共に、本箱を幾箱かづゝ分擔して、その中の書物の目録を作り、まづ蔵書の大部分を一覧したのでありました。

やがて帰京の後、一行のノートをカードに作って、整理しました所、蔵書の珍重すべきものゝ甚だ多い事と、そして神皇正統記の尚現はれない事とを知ったのであります。

そこで神皇正統記の徹底的捜索の為にも、又その他の古書の顕彰の為にも、六蔵寺の蔵書を完全に整理し調査する事を必要と考へ、只その実行方法について頭を悩して居りまし

資料の研究上、当然六地蔵寺に足を運ばねばならず、その法宝蔵には他にいかなる秘籍の架蔵されるかを捜るのをたのしみに機を待っていた。その間水戸出身にして平泉博士の門に学ぶ中央大学の飯田瑞穂助教授は、氏が博士のカード目録から外典を主として抄出しておかれた六蔵寺蔵本目録をわざ〳〵私のために手写して、恵まれた。氏の好意によって六蔵寺本の外典の概要を知り得て、早急の調査出張を念願したが、この一両年没頭している論考が予定の如く進捗せず、それに忙殺されて、心ならずも延び〳〵になっていた。ところが、同僚の本文庫助教授松本隆信君が校訂解題を担当して、最近出版になった「四部合戦状本平家物語」がまだ印刷中、真字本平家の成立考察上重要資料となるべきものが彰考館に存することが判明し、松本君の調査の結果、之を附録として併せ影印することに決定した。その一つは「刀後聞」なる外題を有する小冊子である。但しこの「刀後聞」というのは原書名ではなく、巻初が欠けて書名未詳の為めに、現存首葉の初三字を以て仮題されたものである。その巻尾には「常州水戸六反田村六蔵寺蔵本／寛政四年七月六日至同五年五月十九日／書写之」なる奥書を有する。従って彰考館本の祖本となった六蔵寺本調査の必要が早急に迫られたわけで、松本君と共に私もこの際宿願を果したいと思い、昨四十一年初冬水戸三田会長の茨城交通社長竹内幹三氏に御斡旋の労を御願した結果、幸に寺の御快諾を頂いた。しかし寺に御病人の取り込み等があった為に、出張を翌年春に延期し、「四部合

た。

かくて、博士は、水戸市有志の後援を得て、東大国史学科学生を指導して、昭和二年三月、翌三年正月と二回にわたる調査整理を行ない、整理終了の一月十三日水戸の公会堂に於いて講演会及び展覧会を開催し、恵範上人及び六蔵寺本の顕彰に尽力された。博士はさらに昭和四年十月六蔵寺貴本中の貴覯書というべき「江都督願文集」を校刊し、巻末に「発刊の由来」を附して、六蔵寺蔵本の沿革と整理の経過を、恵範上人顕彰の一点に集注して、情熱溢れる筆致を以て記された。前記の博士の文も、この「発刊の由来」からの引用で、本稿の記事も亦博士のこの跋文に負う所多い。

広く学界が六蔵寺本の存在と価値を知ったのは、博士校刊の「江都督願文集」のおかげである。博士の調査整理は、文字通り断簡零葉の半葉一片をもらさず、一冊毎、カードにその奥書識語等を記し、カード約三千枚。図書文書にラベルを貼り、部門を分って、木箱に納めること約六十函。以て宝法蔵に収め、カード目録は六地蔵寺と東大国史研究室とに備えられた。短時間に昼夜兼行整理の業を敢行された平泉博士の熱意に対し、その学恩に浴すること多い後学の一人として、満腔の敬意と感謝を捧げねばならぬ。

博士校刊の「江都督願文集」の口絵等によって、室町鈔本論語集解や文鏡秘府論の架蔵されることを知っていた私は、目下本文庫に於ける研究課題である漢籍古鈔本、室町以前日本漢学

戦状本平家物語」は刊行を急ぐ必要上、その附録は彰考館本を以て影印し、もし六蔵寺の祖本と重大なる差異が発見された場合は、別途道を講ずることにした。

松本隆信君、文庫の複写撮影係の井上善一君と三名で、六地蔵寺の門に初めて立ったのは四月八日である。山門を入ると、桜・桃・椿が婉然として迎え、芳香木薫馥郁として馨り、本堂前のしだれ桜の巨木の散りぎわの美事さに先ず見とれた。堂宇浄潔。私の六地蔵寺への第一印象は、前掲の平泉博士の廃頽零落とは全く正反対で、閑雅暢適の一気が境内に漂うのを感じたことであった。それは訪れる季節の秋霜と暢陽の差に基くか、寺の復興の成った故か、いずれにせよ、この予想に反した初印象は私には嬉しかった。

住職栗原隆興師は、私共の閲覧の便を計って、わざ〳〵蔵書の全部を、書庫から本堂の外陣の一室に移して、函号順に整然と列べて、待ち受けておられた。早速閲覧にかゝり、私の必要とする外典関係の本はすぐに検索して、簡単な目録ではわからなかった新しい論語抄の出現やその他の新発見に喜びながら、調査をすませ、複写撮影を進めることができたが、松本君の目当てとする「刀後聞」は元来原書名が未詳であるから、こちらの祖本の書名は何と題してあるかがわからず、検索が容易でないことは覚悟していたが、案の定、目録を検索しては、それらしい本を当っても、探り出せない。結局蔵書全部を二人で分担して一応ざっと見て、目ぼしい本はノートしながら探そうということになった。今回の出張の目的は、私は広い意味の日本漢学資料の調査と複写、松本君は前記の通りで、出張の日程内に、時間の余裕があり、寺の御事情が許せば全蔵書に目を通し、広く善本を捜って調査し、文庫の資料として将来必要と思われる図書はなるべく複写するという方針であった。

恵範上人自筆本、上人手写・手沢本から、聖教類へと二日、三日と、六地蔵寺法宝蔵に涵泳し淹浸して行くうちに、私共の気持に変化が生じて来た。要するに恵範上人を頂点とする室町時代を通ずる列世住職の刻苦勉学蒐書の熱意に心身共に感動させられたのである。恵範上人の人と為りには平泉博士の文によって既に心ひかれ、傾倒していた筈である。しかも愚なる身は実地に臨んで初めて実感せざるを得ぬ。自筆本に親炙し、その奥書識語を読み行くうちに、研究と並んで、東洋古典の蒐書という重要使命を有する斯道文庫の職責に列なる私共にとっては、名山古刹に学んでは鋭意先哲の遺著を書写し、宗典宗義の貴覯書を捜っては千里を遠しとせず、探しあぐんでは神仏に祈願をこめ、めぐりあい、求め得ては、その法悦を直述する識語の一字一句は四百年前の他人事ではないのである。「江都督願文集」が天壌間の孤本であるとか、「少室六門」が新出の五山版であるとかという個々の本の貴重性もさることながら、それ以上にこの法宝蔵の現存本総体を一箇不可分離の一生命体と看做し、その文化史的価値と意義の重要性を痛感するに至ったのである。それにしては、図書の現状はあまりにも、貴重本ほど蠹

蝕朽爛乱脱の態が甚しく、永久保存に耐え得ぬ状況である。此を放置して座視するに忍び得ぬ情を禁じ得なかった。私共にこの心を湧出せしめたのは、本法宝蔵の有する価値と魅力、この宝蔵を蒐集した学僧の精神力が今も放つ迫力のしからしめる所であるのは勿論であるが、御住職父子の、本経蔵保管に対する強い責任感、学術に対する敬虔なる御理解、御一家をあげての心あたゝき御款待の与って大に力あることも申しそえねばならぬ。

前に引用した智積院校訂の「大日経疏愚草」跋文に「其本亦蠹損頗多矣」とあり、義公令写の副本の宥密の跋文にも「文字蠹蝕、古本将朽」と記す所から見ても、江戸初既に虫害のひどかったことがわかる。爾来三百年後の今、蠹損の状のいかばかりかは容易に察し得よう。義公が将来に備えて新に書写せしめた副本も今は紙魚の侵蝕する所となっている。胡蝶装の図書の殆どは糸ほつれ、糊はがれ、数多い巻子本はその全部と言ってよい程糊ばなれし、胡蝶装巻子本いづれも各葉ばら〳〵になって、脱葉錯簡甚しく、そればかりか、断簡零葉と化して、原本の旧に復せしめるには多大の時間と手数を要する有様である。最も数の多い袋綴本は、恵範稿本を除いては、幸に汚損が比較的少い。しかしこの状況を放置しては、貴重本は閲覧の度びに欠損の度を増し、巻子・胡蝶装本は漸次零葉断簡に帰する懼れがある。従って永久保存を図る為めには、至急最少限度の修補を今加えねば悔を千載に残すに至る。平泉博士が折角各冊毎に貼られた函架番号のラベルは四十年の間に過半剝落して、函架の次序が乱れ、近時多くなった閲覧者のうち心なき輩は乱雑勝手に書箱に納め、今後の保管上憂慮すべき事態を来しているのである。

以上の現状に鑑みて、栗原師と今後の経蔵の永久保管対策について一夜懇談した結果、本法宝蔵本全体を茨城県文化財として一括指定の申請をなし、その補助と、檀家を始め水府有志の義心に訴えて保存会を設立して、その義金によって要修理の緊急度に応じた年次計画を立てゝ、早急に典籍修理を計る準備を行なうことになした。県の教育長檀家総代の方々に連絡した所、多忙の折にも拘らず、早速来寺され、視察の結果、寺側の希望に共鳴され、何らかの具対策を考慮されることになった。また県文化財の専門委員を兼ねられる、私共とは旧知の、彰考館文庫の福田耕三郎氏も来寺、一日調査を共にされた。従って私共も、そのお手伝をすることになり、予定の日程を二、三日延ばし、全蔵書目録をこの際至急再編修し、できる限り零葉断簡の復元を図ることにした。というのは一つは平泉博士の整理は何と言っても短期間に多人数で行ない、各冊毎に奥書を記述すること詳細を尽したが、二冊以上、殊に多数冊の図書のなかには、一部と看做すべきものが、その各僚巻が別々の図書として著録されるものがかなり多く、また刊写の年代の判定記載が殆どなされず、著編者名、書名の著録等に、蔵書目録としては書誌学上多々不備が見られるので、勿論完備は望めないとして

も一応この際でき得る限り、補訂する必要を認めたからである。

こゝで予定を変更して、松本君と共に目録の編纂にかゝり、平泉博士のカード目録と現物とを対照しながら著録を始め、典籍の部分のみの目録の補訂はほゞ終了した。その間、別れ〳〵になっていた僚巻を復元し、どの本に分属すべきか不明になった零葉零冊をかなり復元し得たが、古文書類には手が及ばず、零葉断簡の復元作業には相当数の量をまだ残したが、校務の都合上、松本君は四月十四日、私は十六日に帰京せざるを得なかった。帰京後、急いでどった目録を点検し、更に参考書に当って不審を訂して補ったが、まだ〳〵不備を痛感し、し残しの作業もあるので、再び五月一日二泊三日の予定で松本君と共に出張した。今度は東京大学助教授築島裕、広島大学助教授小林芳規の両氏が応援に同行して下さった。四人で本堂にとまりこんで昼夜兼行前回手の及ばなかった作業のし上げと前回の目録草稿の不備の補訂に努めた結果、まだ〳〵不備の点は私が一番痛感している次第であるが、六地蔵寺法宝蔵典籍古文書目録（草稿）を一応作製することができた。甚だ前置きが長くなったが、以下その結果の概要を報告することにする。その前に、本稿の冒頭から度々その名の出た、六地蔵寺蔵本の根幹をなした恵範上人の略歴を紹介したい。その略歴については既に平泉博士が前掲文に記しておられる。上人の著書を最近僅に瞥見したにすぎない私は新に加え得るものは何等ないが、説明の都合上略記する。

六地蔵寺は宥覚を開山とし、第二世を宥実、第三世を恵範とする。恵範、その俗称、郷貫を明かにしない。上人は名だたる僧伝僧史にその名を残した所謂る高僧ではない。世間並の位階勲等流の評価を下せば、戦国時代に常州の一田舎寺に生涯を送った名もなき一学僧である。従ってその行状記も伝記もない。たゞ存するのはその浩瀚なる著述と一千冊の手写手沢本である。従ってその伝記資料はそれ等典籍に記された奥書識語の類である。それ等に基いて以下略記する。寛正二年（一四六一年）の生れで、それは応仁の乱より六年前である。平泉博士は寛正三年とされたが、それは数え年の逆算で「大疏指心鈔再記」巻十二・十三の奥書等に、「享禄四年恵範満七十」と自署する如く、恵範の年齢の自記の数え方は現代流の満のそれによっている。出生地は明かでなく、言い伝えによれば、六地蔵寺近辺と言われ、前掲の六地蔵寺過去帖には「恵範取上母妙安禅尼」の名も見えるから左様であろう。第二世宥実（永正二年寂、七十五歳）について恵範が得度したのは、「浄不二鈔」の享禄五年の奥書に、夏臈五十五年七十一と見える所から逆算すれば、文明十年十七歳の時で、翌文明十一年には宥実より金剛界胎蔵界両部の印可を受け、また三宝院伝法灌頂血脉を伝授された。青壮年時代の署名は离准房恵範、また土龍と号したことが「文鏡秘府論」の奥書に見える。六蔵寺或は常州の真言宗の諸寺院で修業していたらしい。その後郷関を出でゝ、上方に上り文明十

九年廿六歳には伊与国安養寺に学び、長享二年廿七歳には讃州多度郡宇野津の聖通寺に滞在、翌年には三井寺、延徳二年廿九歳から翌年にかけては東大寺に学び、その間四国大和の古刹に名僧知識を訪ね、その講筵に列って聞書を筆録し、或は先徳の遺著の書写に専心したことは、現存する多数の上人の写本聞書類の証する通りである。その後帰国し、明応四年卅四歳から明応七年頃は常州栗崎の仏陀院にあった。明応九年卅九歳再び出でて山城の醍醐寺に学び、翌年にかけて伝受灌頂を授かり、且つ他人にも誂えて、盛に書写の業を進めて、大量の聖教類を担って、間もなく帰国した。六地蔵寺には恵範が書籍運搬に使用したと伝える天正十八年の銘のある笈が存する。また、恵範が上方からはるゞ本を荷わせて牽いて来た牛が、六反田に着くや、力尽きて斃れたので、その牛を葬むったと伝える牛塚がある。恵範にまつわる伝誦の悉くが、本と結びついているのは、近隣の人々には恵範と本とは不可分離の印象を強く銘刻していたらしく、興味がある。

恵範が六地蔵寺の住職に就任した年月は明かでない。先師の第二世宥実の入寂は永正二年、恵範四十四歳の八月であるから、恐らくその前後であろう。中年以後は六蔵寺に住して離れることなく、研讃講談著述書写に三昧精進したと思われる。恵範は境内に穴窟をうがって書斎となしたと伝えられ、義公副本の「倶舎頌疏心車再記」の宥密の跋文に「坐于穴窟之中、著此疏鈔」とまた宥密の筆の断簡に「聞説範師当書撰述之中、於寺内居士穴中而草案」とある。文鏡秘府論の奥書に自ら土龍恵範と署しているから、事実であろう。

その寂年は明かでない。奥書識語に見られるその名の最下限は天文六年七十六歳である。天文十五年弟子の恵潤が、先師の追善供養として、先師の宿願を遂げんが為めに、弘法大師行状図会十巻を摸写施入しているから、平泉博士の推定された如く、その寂年は天文六年の暮か七年頃であろう。

恵範の著書は後述の通り、廿七歳の編著たる「倶舎頌疏聞書」に始まり、七十二歳の「大疏指心鈔心車再記」に至る。現存本には闕巻があり、亡失した遺著もあることと思われる。六十以後の晩年に大著が続々と執筆され、殊に注目すべきは、一書稿成るや、直ちにその補訂に力めて、再治、三稿と生涯その改訂の筆をとゞめぬことである。その研学は、真言宗の宗典たる大日経の注釈と倶舎論の疏注を中心として、頼瑜の説をうけつぐ新義真言宗の宗義を明かにする編著類である。その多くは頼瑜注に対する疏釈の形をとるものが多い。他は諸寺の依頼を受けて草した表白願文勧進疏諷誦である。此等の恵範の文藻を編した「諸草心車鈔」六巻の文集が六地蔵寺にあったが、此は宥義が長谷寺に持ち去って、寺外に離れ、久しく長谷寺にあったが、今は某所にありと言われる。再びこの書が六地蔵寺に帰らんことを切望する。恵範がその撰述の書名の大部分に「心車」の二字を題するのは「恵範」の二字の扁傍を取ったものである。仏教の専門家でない私は特に真言の宗学に闇く、上人の

著述は目録をとる合い間に所々拾い読みした程度であるから、その学風を論じその学識を評価する資格はない。たゞ門外漢の覗覧ではあるが、その学風が中世期の宗学の一般と同じく、先学の説を撮輯して自解を重積する疏釈であり、その態度は述べて作らず、篤実精審であることは十分に看取される。

当時門閥の生れに非ずして才能に恵まれた者の出世の道は、中央の大寺院に於て学僧として栄達することである。才気ある僧侶の名誉欲と誘惑は深刻である。恵範は学識に富み、文藻に長ず、加えるにその刻苦精励の性を以てすれば、中央の寺院に於て学僧として立つ能力と資格とは備っている。青壮の年、大和・山城に遊学し、その好学の姿は講師の眼にもとまったであろう。学僧として顕栄する道を望うと思えばその機会はあったに相違ない。しかし恵範はその道を上らずして、経典の重さにあえぐ牛をひきく、身にあまる大きな笈を担って常陸の寺に下った。以後三十有余年土穴中に坐して述べて倦まず、自らのみならず弟子を動員してまで書写して輟まず、老眼霞の中の花の如しと嘆じながら、加点を続け、七十老眼盧之中盧校了と識す老僧の姿は名聞や僧位とは無縁である。恵範の生涯は自ら号する如く、文字通り土龍さながらの学究生活である。恵範の念ずるのはたゞ後学の為めに宗義を明かすにあった。その道はただ講義著述加えるに聖教の蒐集である。当時典籍の得難きこと今日の比ではなく、僻陬に於ける困難は想像に絶する。それだけに或る意味で地方に於ける文庫の必要度は高いと言わねばならぬ。恵範の蒐書への執心が強烈であったのは、自家研讃上の已むに已まれぬ必要に出たからでもあるが、それにとゞまらずして遠く後生を慮ったからであるに違いない。此はアカデミーのとるべき古今東西を通じて変らざる王道である。六地蔵寺法宝蔵の全相を把握せんとすれば、先ずこの蒐書の精神を忘却してはならぬ。

六蔵寺蔵本の内容はいかなるものであるか。平泉博士は全典籍古文書を次の十部門に分って、函架番号を附して整理された。それに従って、現存本の部数冊数をあげれば、左の通りである。

甲　恵範著述類　四三部一二二冊附一葉
乙　恵範書写並手沢本類　一一三部三四〇冊附五括六葉
丙　聖教類（中世）　四三二部七三〇冊附三括十葉
丁　聖教類（近世初）　三七部四一冊
戊　外典類　二四部四八冊
己　恵範関係巻子本類　十三部卅八巻附一葉
庚　巻子本類　一七〇部一八六巻
癸　刊本類　六〇部四七〇冊附二括
辛　恵範関係文書類　四六点五〇通
壬　文書類　三六一点四二九通
以上典籍部八九二部一九七五冊附十括十八葉
文書部四〇七点四七九通

右の分類は必しも厳密なものではない。甲の中で、乙に分類

すべきものがかなりあり、乙に分類されるべきものが、戊に入り、各門その類が多い。また、丙は聖教の中での中世写本、乙は近世初写本の意味であったらうが、その時代判定はかなり違っていて、この両門の分割はあまり意味がない。今回の整理と目録では、僚巻の散在したものを、原旧に復した外は、分類と函架番号は便宜上平泉博士の整理方式の旧に従って改めなかった。冊数で一括とあるのは、多数冊本で、糸がほつれて、旧冊数の推定が困難なるものを、錯簡脱丁の序を正すまで暫時くゝってあるので、便宜一括と数えた。前に述べた如く、大分旧にもどしたが、まだ分属の定らぬ零葉零巻が一山残っている。

六蔵寺の蔵書の内容は大部分は真言宗を中心とする仏書であって、それは真言の依拠経とその注釈類、祖典宗義（特に頼瑜系）の論義書抄物、儀軌修法秘法書とその秘説抄物、真言宗で重んじられた悉曇・韻鏡類、法華経その他の経文と注疏、他宗派の書も有するが、就中禅宗関係が比較的多い。巻子本の過半は修法類である。写本は古くは平安から近世初に至るが、八割まで室町時代の書写本である。近世初以降は僅少である。刊本は写本に比すれば、その数は遙かに少く、鎌倉から室町までの旧刊本と、江戸時代は延宝以前のが大部分である。要するに、室町時代の寺院文庫の典型を示すもので、聖経の基本図書が充実している所から見て、質量共に当時の地方寺院としては立派なものであったと思われる。特に乙・丙の部の装訂は近世初頃まとめて製本した時があったらしく、その表紙の裏打には鎌倉時代刊春日版が使用され、中には往々珍しい版式の摺経も見うけられる。

古文書の部は大部分が、血脈灌頂印可状の類で、それに寺領朱印状で、南北朝から江戸時代に至る。江戸期の文書には寺院経済資料その他が多少入っている。

この蔵書はいずれも寺の単なる宝物ではなく、実際使用された本である。これ等典籍古文書を通じて、六蔵寺は学問寺であったという感を強くする。此等の蔵書は恵範一人の蒐集に非ることは言うまでもないが、上記の表で判明する如く、恵範の蒐書部数が最も多く、且つ浩瀚な基本図書が多い。乙・己部は恵範の手写にかゝるもの、或は識語から恵範の手沢を経たものゝ確証あるものゝのみである。丙部の中でも恵範時代頃書写された写本が最も多いから、恵範の直接間接の蒐書数は更に多いと考えねばならぬ。蔵本中書写者名の明かなものゝのうち、恵範に次いで、書写本の数の多いのは、恵範の師たる第二世宥実である。六蔵寺本には南北朝中期から文明頃にわたって、常陸の国の各所で書写された図書の数は相当量にのぼる。此等は開山から宥実への伝領本か、その間に他より譲渡を求める等蒐書に努力した結果で、その伝統をうけて恵範とその周辺が積極的に経蔵の充実に尽力して頂点に達したものであろう。根来寺に於て購得したという如き識語を有する本もあるから、関係者が手写したものばかりでなく、他より譲り受け或いは購入したものもあるようである。平安鎌倉鈔本の如きは、購入本かもしれぬ。

恵範後の蔵本は漸次下降線を辿り、写本ではほゞ寛永初に止まる。江戸時代は写本ではなく板本の時代に入ったのであるから、江戸時代の板本の収蔵が多くなりそうであるが、板本は僅かで、それも大体寛文以前の版にとゞまっている。江戸時代から六地蔵寺は学問寺としての性格を失ったわけである。この特色は六地蔵寺に限らず、多くの寺院文庫に共通の現象で、特に旧仏教の宗派に著しい。江戸時代になると僧侶が学問を放棄したのである。文化の中心が仏教から儒教に移ったことも影響していよう。

六地蔵寺法宝蔵典籍の現代に於ける学術文化上の価値はどうであろうか。蔵本中他に類を見ない古鈔本旧刊本の存することは次の善本解題に記す通りであるから、こゝに個々については言及しない。その大部分が旧鈔本・旧刊本に属することは本宝蔵の優秀さを物語る。しかし仏書は旧鈔本の存在が多いから、それのみでは必しも高く評価することはできぬ。本経蔵には宗義関係の基本図書と当時の聞書類、秘法次第書が或る程度網羅的に集められていることは、全体として中世期の真言宗学講学の様相を如実に考察し得る点に於て極めて貴重な資料を提供している。こゝの蔵書文書は所謂る地方史資料としては或る意味では乏しいかもしれぬ。しかし本蔵書には、詳しい奥書・識語を有するものが多いのは一特徴である。従って、この奥書識語から南北朝から室町末に至る、就中常州に於ける真言宗教学の動向を辿り得る地方史資料としての価値は多大である。

しかしこの法宝蔵の文庫が天下に冠たるものであるとか、仏書の蔵書として他に比類を見ぬ価値を有するという如き過大評価を私は下すものではない。大和・山城・叡山・野山の中央大寺院の蔵書に比すれば質量共に問題ではない。それは比較する方が見当違である。一千有余年の歴史を有し、朝野の庇護が厚く、全国各地より学侶の蝟集する中央の大寺院は、現代の言わば東大・京大・慶大・早大の如き地位に相当する、この大学の蔵書と地方の一高校の蔵書とを比較して品評することは土台無理である。前者はあるのが当り前である。六蔵寺の当時に於ける寺格がどの程度であったか知らない、片田舎の一寒寺ではないとしても、地方の本山格の格式を有する古刹ではない、言わば平凡な中流の寺とみるのが穏当であろう。しかも当時としては新設の寺院である。室町時代に於ける地方の寺院の経蔵の水準がどの程度であったか、現在としては残念ながら知られていない。しかし六蔵寺経蔵は当時の地方寺院としては高い水準を有していたと推定することは間違いではあるまい。天災人災相因って、数ある名刹の中でも、文書は別として古書を遺存する寺は少い。名だたる大寺院でも経蔵は案外淋しいものである。勿論古寺の中では、国宝とも言うべき古鈔本古槧本の秘籍を蔵するものはかなり存する。しかしその什宝の多くは各々孤立的存在であって、経蔵全体の図書群が一有機体的生命を必しも有するものではない。六蔵寺本の如く、中世期の宗学の聖教をある程度網羅したワーキング・ライブラリーがほゞそのまゝに遺

存する例は、地方寺院としては極めて稀有な存在である。私が繰り返し強調するのは、六地蔵寺法宝蔵の価値は先ず第一にその文化史的精神的意義に存する点である。

蔵書は蒐書者の分身である。私は諸所の公私社寺文庫を訪ねる機会が多い。その文庫の蔵する個々の典籍の価値や貴覯性に対する興味の強いのは言うまでもない。しかし最も関心の惹かれるのは、その蔵書群全体を一箇の有機体と成さしめる生命の貫流の有りや無しやと、その蒐書の精神とである。好事家の蒐書の生命は脆く、その盛衰は無常である。高邁なる理想と純一なる精神に発したる文庫は盤石の力を永遠に有する。廃れんとしても人感じては、廃れるを興こすものである。金沢文庫然り、足利学校亦然り、その施設はその時代的使命を果して滅びる、しかし典籍はそれ独自の力を発揮して蒐書家の精神をのせ伝えて、後世永く恩沢を垂れること、正に法力無尽の如しと言うべきである。正しく法宝蔵である。恵範和尚によって基礎をおかれた六地蔵寺法宝蔵また然るべしと信じて疑わぬものである。

私共の六地蔵寺訪書行は、元来はその法蔵の本流からは外れた外典の捜書にあった。その結果は、平泉博士が神皇正統記を求めて六地蔵寺に来り、「神皇正統記が現われないとすれば、私共の努力は、その結果から見れば、専ら恵範大徳の顕彰といふ事になったのであります」と言われたと同様の経過を辿り、期せずして博士の驥尾に附するに至った。しかし、此は訪書家としては洵に望外の至福至悦と言わねばならぬ。牛にひかれて善光寺参りといふ俚諺を痛感する。

法宝蔵善本略解題

六地蔵寺法宝蔵典籍の紹介に当って、個々の善本を選択して解題するより全蔵書の目録を先ずのせる方が、私が強調した趣旨に適うのであるが、それには紙幅が許さず、今回の目録は短時間に手もとに参考書もなく、作製した草稿であるから、未だ不備が多く、特に担当した私共は真言宗の宗学には不案内なために、我ながらもどかしさを感ぜざるを得なかった。今後この方面の専門家の協力を得て、さらに万全を期して改訂につとめ、いずれ全蔵書目録が公表される機のあることを待って、とりあえず主要書を選択して紹介することにした。と言っても六地蔵寺本の大部分は仏書の古鈔本であるから、今日ではその殆どが善本と言ってよい。従って仏教の専門家でない私の選択では、形態書誌学的範囲内では可としても、内容上からは肯綮を失する懼れがあるのを慮って、その選択の基準を次の如くなした。

本法宝蔵の全体を理解する上から、恵範上人関係の甲部恵範著述類、乙部恵範書写並手沢本類、己部恵範関係巻子本類に関しては、断簡を除き全部を著録した。丙丁庚の仏書類は上記の理由から思い切って大部分割愛し、たゞ書写の比較的古いもの、由緒あるもの、旧刊本、仏書中でも比較的外典に近いもの

のみを録した。従って省略した仏書が、恵範関係故に著録された本より、客観的にその価値が劣るというわけではない。外典はなるべく録することにした。古文書は恵範関係でも一切今回は省略した。従って辛・壬の両部門は悉くあげていない。

書名の上に冠した算用数字は架号で、乙部の4であれば、その本の函架番号は乙4である。但し説明の都合上、他の部門の本を併せ録した場合、例えば乙部の中に、丙部の本を録した如き場合のみ、丙5の如く冠した。書名から内容の推測できる如き類は説明を省いた。奥書等は紙幅の関係上悉く掲げることができず、特に重要なもののみを抄録するか、解説の中に織りこんだ。形状大きさの寸法等は今回の元来の訪書の目的であった外典については記録したが、上記の通り、予定を変更して全蔵書目録編纂を俄に行うようになった関係上、一々記録する餘裕がなかったので、大部分は省かざるを得なかった。全体として選択・著録両面に於て、外典に詳にして内典に略、解題の精粗繁簡甚だ不統一を免れないのは、上記の理由から恕されたい。

甲　恵範著述類

1 倶舎頌疏聞書（有欠）　長享二年自筆　七冊

現存第一・二・四（前半欠）五・六・七・十三―十六・廿三―廿九。巻頭内題下に「長享二年七月廿八日始之　离准記之」と。「聞書」を「私記」と題する内題もある。大概各篇初題下に起筆の年月日を記し、末尾には奥書を有する。奥書の主なるものを拾えば

（第二）　長享二年申八月廿九日記之畢廿八日講説畢

（十三）　已上十月三日畢　如形諸抄集質解述事全非為他鏡偏為補自廃忘記功畢自他平等抜済　离准記二十七才

（廿四）　長享二年十一月九日於讃州平山宝光院堯聖二鈔得捨任意集記了　离准二十七才

（廿五）　長享二年十一月十一日於讃州平山宝光院且為自証且為分化拾古昔之旧儀記当今之新儀願酬鑽仰馳筆之功頓証无余之般而矣　离准二十七才

（廿七）　長享二年十一月十五日夜尅於讃州多度郡宇足津聖通寺宝光院閑室松嵐触身膚竹雪寒心肝難堪非一雖然求法拙意難息間集記功畢定有謬誤耳　离准二十七才

（廿八）　長享二年十一月十九日集記功畢　已上就頌疏八品或検隆記被聖堯両記兼載愚解分十一巻集記畢謬解不暇毛挙雖然昼夜讃仰之功且酬執筆之徳正躅之日摧我執之塵頓至般涅槃果矣　离准二十七才

現存の恵範撰述書としては最も若い時の著作で、廿七歳、讃州聖通寺に於ける編述である。唐の円暉の「倶舎論頌疏」に対する堯円隆善聖憲等の先人の抄を取捨して、自説を附した注釈である。奥書に講説畢とも見えるから、聖通寺に於て、倶舎頌疏の講義を聴講しながら、編述して行ったものであろうか。

乙135　同上（有欠）　延宝二年徳川光圀令写　九冊

存第二―七・十四―廿二・廿六―廿九。義公が前掲本を副本として書写せしめた本で、巻尾に宥実の跋文がある。本書は自筆本とこの義公令写本とを合せても、欠巻がある。恵範の奥書に分って十一巻となすという如く、元来十一冊あったものである。

23〔倶舎〕頌疏心車再記　巻廿四・廿五　天文一・二年自筆
二冊

巻廿四には天文元年十二月廿四日の奥書を有し、巻廿五の奥書には、

先年於四国讃州聖通寺記畢雖尓但披覧堯円隆善聖憲等記未閲覧恵暉遁麟今度為恵源俊長両弟欲講談此疏仍如形再記了且短頑且老朦故烏焉馬之誤定招恥辱矣　天文二年癸巳正月十二日馳筆七十二恵範

と。即ち、門弟に対する倶舎頌疏講義に際し、前掲の青年時代の聞書を、前回参照しなかった唐の恵暉遁麟の二大疏をも使用した再訂本である。恵範の訂補の著述が全巻にわたってなされたものか、この二巻のみに止ったか、伝存本がないので明かになし得ない。

Z134　同上　延宝二年徳川光圀令写　二冊

前掲の副本。巻末の宥義の跋文に曰く、

仏海渺茫慈航遍満大虚寥廓須弥杳冥菩薩之利衆生先覚之哀後達載籍極博膚浅難暁就中倶舎頌疏其義深遠歴世作之註釈者於異域則遁麟恵暉二人在本朝則北林房与　先師恵範上人也耳

上人自少潜心倶舎研覃累年甫二十有一歳叩園城寺座主暨阿州大龍寺上人而討論細議得其妙秘於是皈当寺坐于穴窖之中著此疏鈔以名倶舎心車鈔凡　先師所著之書心車自命者蓋偏分恵範之字也（倶舎頌疏聞書跋も同文）

32〔倶舎頌〕疏心車　第三　自筆　一冊

前掲23本と書写時を異にする如く思われる。聞書と前掲本との中間に位する稿本か。本稿執筆中に、万治三年刊恵範撰「倶舎論頌疏世間品心車鈔」の存在を知った。明応六年卅六歳の著という。岩波の「国書総目録」によれば、大谷大学・高野山持明院蔵。また国立東京博物館には嘉永元年写一冊、青蓮院吉水蔵に正保二年写一冊を蔵すと。此は恐らく恵範著書の唯一の刊本であろう。未見のため、この刊本と(1)(23)(32)間の関係を明かにしない。いずれ調査の上報告したい。

3 梵網古迹心車鈔　明応七年自筆　二冊

上冊の扉には「梵網古迹心車鈔大意第一」とあり、巻頭題下には「明応七戊午二三於仏陀院恵範記」と署し、次に序して曰く、

夫求法之輩希優曇非レ譬進レ悪族又瓦礫猶少粤宗印房望ニ古迹之講談一請ニ　戒律之指南一顧ニ无知一欲レ辞　慳生罵辱十重之其一貴ニ説戒一欲レ講一虚偽作師六八之随一也所レ詮修ニ懺法一可レ滅ニ軽垢罪一仍談ニ此疏一因而為ニ弟子分此鈔記耳

と。巻末に「已上大意分」と。下冊は内題に「梵網古迹玄談

心車鈔明応七戊午三月十二日於仏陀院恵範記」と署し、巻末に「以上殺生却盗二戒畢」と。その奥書に

明応七年戊午八月三日記之去春雖開闢此疏於六蔵寺伝此灌頂有之然間閣之至当秋談之因余暇為愚童大綱記　离准房卅七歳

2 梵網経古迹心車鈔別誦　第三自重殺生至軽五章　明応七年自筆　一冊

前掲本が中本で、此は大本。前者の扉に「三―内末終」、此の扉にも「三巻内末終」の墨書があり、此に述べる所既に前者で説かれている所もあるが、その続編と見なすべきであろう。巻頭に「無慈行欲戒第三　於仏陀院离准房記之八月四日」とある。奥書に

竊以戒律分廿部尸羅別三聚部広六十軸抽四部豈以短才呈其鏂幽雖然為二三子記此鈔　明応七年戊午八月十四日末尅　离准房恵範三十七歳

新羅の太賢撰「梵網経古迹記」の注釈である。

4 勧進疏心車　〔室町〕写　一冊

書名は外題による。表紙右下端に「一乗院宥元宥頌」と署す。吉田郡酒戸郷瓔珞寺再興の勧進疏（明応四年〔卅四歳〕宥鏡法印に代っての作）、明応八年吉田郡長岡寺法花堂（水戸真寿坊）再興の勧進疏（卅八歳の作）の二首を収む。行間に細字の自注を附するので、「心車」と題したのであろう。

5 稲荷遷宮表白　〔室町〕写　一冊

巻頭に「御遷宮私書」と題し、又「心車満四十記之」と。遷宮の儀式作法を師の口伝に任せ、私の故実を以て記すと。

10 秘鍵開蔵抄心車　二巻　天文六年恵範令玄心房写　二冊

大永元年十二月十九日の自序（恵範六十歳）あり。上巻の恵範自筆の奥書に

去大永辛巳雖記以愚本山城京洛人恵印指心鈔講説之時雖奉借依遠路不能返賜仍七十六之時奉誂玄心之御房以大聖寺本写之而已　天文六年丁酉正月開蔵抄講談之時恵範七十六矣

下巻奥書（他筆）に

大永改元之節対三五之客而講此抄因之如形解本末之抄仰願文殊般若一言撤法性普解自他之無明ウム中性一句当宗義久達四徳之楽岸而已　辛巳十二月十七日　恵範満六十（以下自筆）重七十六歳之時奉誂玄心御房再書写了　（以下朱筆）此時朱点加了

頼瑜の「般若心経秘鍵開蔵抄」の注釈である。

22 開蔵心車鈔上天　〔室町〕写　一冊

前者の前半部の写。自序なく、巻頭題下に「辛巳於六蔵寺閑居記之恵範満六十」とある。

9 金剛界心車　上・中（上尾欠）　大永三年自筆　二冊

巻頭題名下に「大永三癸未恵範鈔レ之」と。扉に書名の下に「未再治」とあり。六十二歳の著述。

11 同　三巻　天文六年釈宥海写　三冊

（巻上奥書）大永三暦癸未三月廿六日記之或解発恵之難解或伝授之時為不求口決記加全文後日可清書　法印恵範六十二才

（巻下奥書）天文丙申菊月十七日於六蔵寺書之　宥海廿三

12 開解鈔心車（第一歳摂下 第二論中）　大永四年自筆　二冊

第一の巻尾に大永四年五月廿八日、第二の巻尾に「大永四年六月廿八日」の奥書がある。六十三歳の著述で、頼瑜の「釈摩訶衍論開解鈔」卅六巻に対する注解である。奥書に「企当抄一覧之誓以其次自見之分記之」とある。卅六巻全部に亘って注が完成したか否かは不明であるが、次掲の天文四年（七十四歳）の奥書本の扉に「未再治」とあるから、長年月に亘って、部分的に抄して行き、全巻には及ばなかったのであるまいか。

20 開解鈔心車（第一上・中・下本末・第二中 第二中論巻第一中）　天文四年自筆　五冊

第一末に天文四年六月廿二日、第一中末に同七月十四日、下末に年月未詳の奥書がある。第一末の奥書には、開解抄が中古以来根来寺に於ても講談の家を聞かないのは、結局難解の書たるによるという旨が述べられている。

13 開秘心車鈔　二巻　大永六年恵範令写　二冊

（上奥書）大永五年乙酉十月十六日記之畢是偏為上求菩提下化衆生矣恵範六十四歳

大永六年丙戌孟夏上旬誂源覚房清書畢　六蔵寺恵範六十五歳

同年孟夏下旬拭二翳眼一校合畢　恵範六十五才

（下奥書）大永五年乙酉十月十六日為慰老後如形記畢　若有及後覧刊定請之矣　恵範六十五歳

同六年誂深覚房

本書は頼瑜の「声字義開秘抄」二巻の注解である。

14 大疏指心鈔心車（十六巻 附二冊）　大永七年十月―八年二月自筆　十八冊

ほゞ毎冊末に終功年月日の識語を有し、終冊の奥書に

右此抄十六巻丁亥雖十月下旬企一覧至戊子二月四日一覧之功畢願以此功上奉報伝灯恩中報四恩益下遠及六道含職〔識カ〕愚見誤多非再治者禁他見矣

と。頼瑜の「大日経疏指心鈔」十六巻の注釈で、六十六歳の冬から翌年にかけての著。

15 大疏指心鈔心車（再記）十六巻　大永八年―天文二年自筆　十八冊

ほゞ毎冊奥書がある。それ等奥書によれば、前掲の初稿本の脱稿が大永八年二月四日であるが、直に再稿の筆を起し、旬日を出でざる二月十三日には、再治本の巻一が成っている。各巻の脱稿年月日を記せば、巻二（大永八年二月十九日）、巻六（享禄二年二月一日〔六十八歳〕）、巻七（同二月廿二日）、巻八（同三月吉日）、巻九（享禄三年十二月十六日）、巻十（享禄四年正月十三日）、巻十一（同二月五日）、巻十二（同二月十二日）、巻十三（同仲春廿三日）、巻十四（三月五日）、巻十五（同年月日虫損）、巻十六の奥書に、

享徳〔禄カ〕五年壬辰正月廿九日提毫末再記畢　右一十六軸加了簡記レ之更以非為他補自廃忘為旨要若一文通経疏之意一句達指心抄之義者上報伝来之恩下披迷衢之朦矣　沙門恵範七十一歳

巻五（享禄五年九月廿七日）、巻四（同無神月卅日）、巻三本

（天文二年〔七十二歳〕正月十六日）、巻三末（天文二年正月廿七日）。以上の如く、巻三から巻五は巻十六より後に筆を進めた如く見えるが、巻十六の奥書は、全巻脱稿の識語の如く思えるから、巻三より五までは、既にできていた再稿本をその部分のみ更に改訂した第三稿本と思われる。以上の如く、本書は六十七歳より七十二歳に至る五年間、初稿から数えれば六年間殆ど逐日筆を休めなかった最晩年の力作で、奥書には屢々老眼の不自由にして耐え難きを嘆じている。

16 大疏指心鈔心車記　十六巻（巻四・五・九欠）　延宝二年徳川光圀令写　十四冊

末に宥密の跋文あり。

33 伝法灌頂記録遍覧心車鈔　上　大永八年自筆　一冊

（奥書）大永八年戊子十月四日於六蔵寺閑窓注記畢　恵範六十七歳

34 伝法灌頂心車鈔　上末　天正十六年写　一冊

前掲本の転写

17 補忘鈔和心車　巻一・二上・四　享禄二年自筆　三冊

扉に「恵範六十八記之」とあり、巻初に「和補忘鈔心車鈔享禄弐年己丑六月十三日始之」と。「梵網経古迹記補忘抄」十巻（釈定泉・信空口述門人記）に対する注訳書である。

40 入仏表白　〔室町〕写　一冊

題下に「石川円照寺雑言　恵範」と。また末に「享禄己丑二恵範六十八歳／石川円照寺再興入仏草」と。

30 浄不二鈔心車具縁品　自筆　一冊

後掲の「浄不二鈔」具縁品の巻の注解。天文廿四年の弟子恵潤の識語あり。

19 浄不二鈔求得之状　〔慶長十六年〕写　一冊

尾に「慶長十六辛亥九日五日」とあるのは書写の年記と思われる。本状は、恵範が四十年来探し求めた宥詳上人の「浄不二鈔」の成立とその相伝の由来を略述して、この聖教を何とぞ求得せしめ給えと祈った享禄四年七十歳の願文である。後述の如くこの年相州大山寺普賢院の経蔵に本書の有無を問わしめるため弟子を遣しているから、願文と書簡の両体混淆の形の本状はその際弟子をして普賢院にとゞけしめた懇請状であろう。

24 経惟供養白　〔近世切〕写　一冊

扉題の左右に「於亀田執行／恵範草之」と。

25 光明三昧表白　〔近世初〕釈宥印写　一冊

外題「光明真言表白」

35 無常表白　〔近世初〕写　一冊

38 遷宮表白　〔近世初〕写　一冊

26 御遺告心車　自筆　一冊

27 三大種子等事心車　〔室町末近世初〕写　一冊

理智事三点事傍流心車・三大種子等事心車の二篇を収め、荼毘之疏（宥鍵撰）を附す。

28 拾古鈔心車　自筆　一冊

暴雨沈々又暴風　萬花雖散稍尚濃
春愁在暮鳥声静　吟行近籬躑躅紅

老齢恵範五十七

張序と韻鑑序例の詳細な漢文注である。下冊奥書の交本批云応永廿五年九月十日悉曇末資左寺聖清なる奥書は、故岡井慎吾博士の「日本漢字学史」によれば、大谷大学図書館蔵の「指微韻鏡抄」（釈道恵撰末見）のそれと合致するから、恐らく同一本であろう。もしそうであれば、大谷本は前半を欠き、この本を以てその欠を補うことができる。本書は韻鏡抄物としては最も古いもの丶一つである。

2 韻鏡字相伝口授目録・指微韻鏡序聞書　恵範写（他筆交ユ）
一冊

初に相伝口授目録があり、次に序聞書、この聞書の末に欠丁があって、次に聞書と異る、巻頭の目録の本文に該当するらしい相伝口授の抄（前半欠。後半も欠らしい）が合綴されている。扉（元表紙）に「□□私（未知作者）　恵範」と題する。元来は或は「韻鏡私」の書名か。「相伝口授」の文中「悉曇末師有レ誤（コト）其故（ハ）」と見えるのは、前掲の「序解」を指すらしい。この「相伝口授」の中途に「韻鏡聞書上終」の題あり、又「已上草案追可正之」とも見える。本書は漢文体に近い抄である。

148 吽字義　秋空海撰　〔室町〕刊　高野版　恵範識語　一冊
4 覚阿抄　第四　〔室町〕写　延徳四年恵範譲与識語　一冊

頼瑜撰「瑜祇経拾古鈔」の注。
29 切韻反皆鈔心車記　自筆　一冊
内題にまた「韻鏡心車鈔」「序解第三愚披心車」と。「韻鏡」の反切法の注解。
31 前方便心車　自筆　（修法書）　一冊
36 論名目心車　自筆　一葉
題名を記した表紙一葉を存するのみ。他に本書に該当するらしいが、首尾欠で書名不明の恵範自筆稿の一冊がある。

2　恵範書写並手沢本類

1 指微韻鏡序解　五巻　永正十四・十五年恵範写　二冊
（上冊末奥書）永正十四（丁丑）閏十之下旬一交畢予不達字学今恣ニ加レ交以管窺天纔一大知天分斉也雖尓鎮西之客以五札之書暫亭余之室因交畢　恵範五十六
（下冊三十六字母第四末）永正十五年（戊寅）三月十七日以尾州下着本一交畢雖尓已後因行業之余暇及老眼可刊定文義也
坐看庭前数色花　春来俗音似仙家
堪愁暴雨一時尅　吟詠无常浮世歌
此詩莫咲非我道恣綴四七　恵範（老来五十七）
（下冊末）交本批云／応永廿五年（戊戌）九月十日悉曇末資　左寺聖清
永正十五（戊寅）三月十八日於深雨中以尾州下着本如形交合畢後日加老眼可刊定文義也

5 覚阿抄　第六　〔室町〕写　扉恵範筆　一冊
6 灌頂雑集　第一　〔室町〕写　天文三年恵範校合識語　一冊
7 大広益会玉篇　三〇巻（巻一―九欠）　宋陳彭年等奉勅編
〔元〕刊　二冊
（巻末識語）右此本両帖雖非全部年来競望之間求得畢即打裏修複末代可為常住物者也而已　享禄庚寅夷則廿七日　恵範六十九
10 倶舎論頌疏記十一巻内（存巻一・十三―十五、十九―廿一）　唐釈遁麟撰　長享三年（於三井寺）恵範写　延徳元年一交　二冊
11 倶舎論頌疏　残本　唐釈円暉撰　文明十九年（於伊与国安養寺）恵範写　明応四年加点　一括
137 同　巻三　〔鎌倉〕写　一冊
巻末に「自根来寺妙未院買得之　常州离准房延徳元年十月十六日」なる識語あり。
12 倶舎論頌疏序記　唐釈法盈撰　長享二年恵範写　一冊
39 恵暉疏鈔（倶舎論釈頌疏義鈔）六巻　唐釈恵暉撰　延徳二年（於三井寺）恵範写　明応四年恵範識語　治承五年本奥書　六冊
112 顕行事度　恵範写　一冊
17 御遺告秘要鈔　二巻　延徳五年恵範写　二冊
117 御遺告釈疑抄　末余・下（有欠）　釈頼瑜撰　享禄二年恵範令写　二冊
103 光明真言法　明応十年恵範令釈宥宗写　一冊
18 五宝事　〔室町〕写　長寛二・康安二年本奥書　一冊
19 五教章問答抄　上第三・中第一下一―一〇　延徳二年（於東大寺）恵範写　八冊
21 降三世　明応十年恵範写　一冊
138 五大虚空蔵供護摩自明相　〔室町〕写　恵範自署　一冊
13 金剛界九会密記　釈元杲撰　〔室町〕写　永正十五年恵範授与識語　一冊
15 金秘伝二・四本・六・六本余・七・八本・八上末・八中・八下・十・十一本・十一本余・十一末・十二・十四・十五・十八　文亀六年恵範令写　十七冊
16 金剛界和鏡　明応九年写　弘安四年本奥書　七冊
22 金剛界曼荼羅口決　本　恵範写　一冊
23 金剛義法　明応十年恵範写　一冊
123 金剛界礼懺私　〔室町〕写　一冊
124 金剛界発恵鈔　三巻（有欠）　釈頼瑜撰　〔室町〕写　恵範識語　三冊
129 金庵記上御所号花御所　明応十年恵範令釈宥宗写　一冊
26 三作韻　上・下平　天文五年恵範令写　二冊
各巻尾恵範自筆の奥書に曰く、
右此三作韻先年藤福寺住之時奉借秡沢東禅院住永寿之本伝写畢然一行七段故重奉誂吉禅院玄心御房書盧字了是併老眼所用也焉　天文五暦丙申九月十七日　恵範七十五
127 三論玄聴書　延徳二年恵範写　一冊
（巻頭）延二七十八日於東大寺東宝崇得業読之离准記之

24 真言宗教時義問答　三巻　釈安然撰　天文三年恵範令写
六冊
第二冊を除き各冊恵範自筆奥書あり、
（第一冊）聖教生恵燈根本法眼開仏智名医爰詢浄不二鈔満金
箕三十有余軸雖朝舒暮巻闇文義然今求此書為指南一切一心
識雲霧晴而多種之月炳現一心一心識九識長夜去而平等之花
芬馥将亦愚第願尋求彼菩提心義得置当寺焉　天文三年甲午八
月十三日（辰時書之恵範七十三）
（第五冊）右披浄不二鈔真言宗之徒安然所作教時義最可一覧
之由被記置也仍奉尋台家人処正直歟恪惜歟无此書天文甲午
暦壬正月之下旬於水戸明神拝殿一七日祈願之旨有之諸衆群
集談話之次花蔵院御所持仍奉借用写畢筆者智順　持主七十
三老恵範
25 疏超記　九・十　恵範写　天文四年恵範識語　一冊
27 四字鈔聞私付戒法　長享三年（於讃州宇野津聖通寺）恵範写
一冊
（首題下）康暦二庚申十一月廿一日於禅舜寺令読之
30 聚雪抄付戒法　三巻　（嘉吉三年）釈瑩一校　長享三年（於
讃州聖通寺）恵範写　二冊
31 秘密曼荼羅十住心論　十巻（有欠）　釈空海撰　永正十一年
恵範令写　八冊
永仁二年頼瑜本奥書。永正十一・十二年恵範加点。
32 十住心論愚草　釈頼瑜撰　天文二・三年（於根来）恵範令釈
恵深写　恵範署名　一括
34 十住心論愚草（第一・第四ノ第三・四（四帖之内））　釈頼瑜撰　大永四年恵範令写
三冊
45 十住心論衆毛抄　一上下・三上下・六下・他　釈頼瑜撰
〔室町〕写　恵範自署　一括
35 声字実相義愚草二巻　釈頼瑜撰　大永四年恵範令写　二冊
36 声字実相義開秘鈔　二巻（上後半欠）　釈頼瑜撰　明応八年
恵範令写　二冊
37 悉曇字記　唐釈智広撰　文安四年釈快宝刊　根来版　永禄三
年恵範施入識語　二冊
38 釈論聴鈔　一〇巻（巻一欠）　寛正七年釈宥実写　延徳四年
恵範付受識語　十冊
39 同　第七上下　天文六年恵範令写　二冊
40 釈摩訶衍論賛玄疏　五巻（巻一欠）　釈法悟撰　天文四・五
年恵範令写　天文五年恵範加点（正応元年慶賢刊高野版の
写）　四冊
41 釈摩訶衍論通玄鈔　巻二・三・四　宋釈志福撰　天文四年恵
範令写　三冊
42 釈摩訶衍論記　六巻（巻一欠）　宋釈普観撰　天文五年恵範
令写（弘安十年正応元年慶賢刊高野版の写）　五冊
43 釈論開解抄一―十八（有欠）　釈頼瑜撰　大永二・三・四年
恵範令写　一括
甲18 釈論愚草（第一中・第二上中下・第三上下・第六上中（有欠））　釈頼瑜撰　大永―享禄　恵

範令写　九冊

44 指心抄聞書　第六　大永六年釈恵深写　一冊
46 指心鈔束言草一―十四（有欠）　大永八年恵範令写　三冊
48 事密抄鈔　第四・五　明応九・十年恵範写　二冊
70A 二教論指光鈔　五巻　釈頼瑜撰　文亀元年恵範写　五冊
70B 同　文明八年写　五冊
97 真実経文句　釈空海撰　明応四年恵範写（嘉暦二年刊高野版の写）　一冊
98 心文十箇切帋　明応八年恵範写　大永五年識語　一冊
74 浄不二鈔　巻一―廿八　釈宥祥撰　享禄五年恵範令写　天文一・二年恵範加点　廿九冊

本書は「大日経疏義述」等とも呼ばれ、所掲本では内題を「大日経疏私記」と題する所もある。伊豆走湯山遍照院に住して盛に奥疏を講して、中古大疏講伝の第一人者と言われた妙浄上人不二宥祥の著、東寺学頭頼宝法印が遙かにその盛名を聞き、後宇多法皇の院宣を請うて、上人に草せしめたと云われ、三十巻或は三十一巻に作る。

恵範は本書を求めること四十余年、終に享禄四年相州大山寺普賢院の経蔵に、本書と不二記の架されることを知り、老齢の故を以て、翌五年弟子五人を大山寺に登山させて謄写せしめた。その間、無事写し得て帰寺せんことを祈って、仁王般若経を毎日三部読誦怠らずして以て神仏に法楽し奉り、入手しては怡喜の至極夢幻の如しと歓び、老眼を拭って披覧の功を遂ぐること二度、孜孜として加点にいそしむ様は次の恵範自筆の奥書に明かである。

（巻二）右此抄者伊豆宥祥上人御記也然間当流自家之珍餘流超過之財無如此書雖然当門徒之内雖尋有名無其本競望過年四十年餘去年享禄四年辛卯従相州大山寺希客下山掃部助来臨隣郷因問此抄之条処俗家如何応知仏家之書籍耶之間返答云大山寺普賢院有一宇経蔵先師得明匠之誉当住有碩学之聞若此経蔵可有云々依坂戸源宗房添賓客凌遠路山川奉問有無之実否処無相違有此抄剰有不二記若干書依此御返答歓喜踊躍次年壬辰二月十四日俊長房陽南房源衆房識叶房五人令登相州下山掃部助殿宿所為筆者座席浄不二抄若干軸并不二記書写畢三月廿六日当寺下着爰恵範怡喜之至極如夢幻誠此書別者当流之骨髄惣者一宗之心肝也秘可秘守可守頂上之髻珠也矣　天文二年癸巳夷則十日恵範七十二歳

（巻八）御本云本来之本無点之故拭老眼加点校　明応四年乙卯六月廿九日斤融六十一才

又云享禄五年壬辰二月廿七日相州大山寺ニテ書之筆者両人廿一廿三老眼之文字如霞中花雖然披覧第二度功畢壬辰八月十四日恵範七十二享禄第五暦壬辰二月十四日遣五人於相州三月廿六日得数軸於愚庵寔以聖教書写之間仁王般若経毎日三部二月中或二部三月全読誦不怠都合百二十一部歟当国神祇并日光宇都宮富士大権現二所三嶋大山不動明王鎌倉若宮八幡宮武州鷲大明神日本大小当所有勢无勢奉法楽依彼冥顕力路次上下山野无賊難河海无漂流災

成就希代之勝事也仍拭老眼一覧并加点畢願酬足疲手労之功求法大願五僧如意挑法灯於竜花之下愚老一部披覧之間達深文於意樹之梢矣　恵範七十一歳

（巻九）于時当鈔競望已満足仍老眼所見之文字如朧月夜之境界魚魯有誤雖然披覧之功第二度已畢八月十六日昼日恵範七十一壬辰

（巻十）相州伝来雖少々加点為令易解了重増点畢壬辰卯月十九日　恵範七十一歳

（巻十六）遂求得之願壬辰二十六日歟誠乎中菴摩勤菓仍墨点如形着畢筆下雖知愚繆広博鈔故即時不能添削若有余命者期厥時而已　享禄五年壬辰五月八日一交并加点了　恵範七十一

（巻十七）仏藪年之競望凌遠路於相州馮五人之筆者馳墨池於法流写功未及三旬対老眼於全軸以短綆之点測深斗之底且恐記者之内鑒且恥後学之嘲哢雖然如形加被覧加一点了　享禄五年壬辰五月廿日　法印恵範夏臘五十五年—七十一

（巻十八）享禄第五壬辰五月廿四日老齢七十一恵範点之

（巻廿）当鈔累年之競望也因茲遣筆師於相州九日路全書写三十一軸少々雖有墨点以一交之次加点了　享禄五年壬辰六月一日

鬼宿恵範七十一

（巻廿五）如形点畢壬辰六月十一日　恵範七十一歳

（巻廿六）壬辰六月十二日如形交并加点矣　恵範七十一歳

（巻廿七）壬辰六月十六日如形雖加点意馬走荒野豈調文句心猿踊枝頭争尽義理雖然露電之世恐須臾尅故提筆　法印恵範七十一

（巻廿八）壬辰六月十七日大坂之宿為祇園之祭祀荘舟車一両奉息牛宿五襄之憂兼令悦人民之眸雖然老躰之藜杖難携怯弱之掌徒蟄居六蔵之閑窓観自性之嬉髪不奈船上之羽衣察一身之歌舞不思角皷之妙音唯対予者雲雀之雛也而已七十一恵範

所掲本の巻廿八は「受方便学処品第十八之餘」で、上記の奥書には「三十一軸」とあり、本書は三十巻或は三十一巻に作ると云われるから、巻廿九以下は失われたのであろうか。

146 大日経疏私記（浄不二鈔）巻六・十七　釈宥祥撰　〔室町〕

写　享禄五年恵範加点　二冊

甲42 大日経疏奥巻聞書爛脱集（浄不二鈔）　享禄五年恵範写

一冊

（奥書）相州大山寺以普賢院之御本伝写畢

享禄五年壬辰三月廿六日当院下着畢爰恵一殊勝銘肝感涙難押只非一世弐世之縁多生薫習之故如此重宝求得歓喜無窮矣

恵範

この奥書の次に不二鈔の総目録を写す。古来論議の多い大日経の爛脱の箇所を巻毎にあげて表にせるもので、前掲の浄不二鈔巻廿八までには、この表は見えない。巻廿九以下にあるのか、或は恵範が浄不二抄の中から爛脱の説のみを拾摭してこのような表に編したものか。

80 不二記　附不二記第一結　享禄五年恵範令写（附）恵範写

廿帖附一冊

畳紙に包み、外題全て恵範筆。旋風葉枡形本。
（七日作壇灌頂奥書）自相州大山寺普賢院以五僧筆功之書写了只非一生弐生之因縁多生之宿縁也　恵範七十二歳癸巳
（三昧耶戒奥書）恵範依数年之競望壬辰二月十四日憑五僧之筆功令登相州大山寺両月令滞留申請普賢院之御本令写畢同三月廿六日午剋許当寺下着了是偏為多生機縁彼山之麓下山掃部助調法并書写之間以彼亭為道場忝御志不応忘癸巳恵範七十二歳挑了
（殊異機奥書）従相州大山寺普賢院書写令申候是偏彼山之本尊大聖明王之御衰憐銘肝而已　天文二癸巳恵範七十二歳
（説会曼陀羅奥書）天文五年丙申認表紙畢不顧斟酌加不二記畢　恵範七十五歳
浄不二抄と同時に相州大山寺に於て書写せしめたものである。本書は宥祥が付法の讃州宥範、醍醐の源暹等五名の師と詰難議論して大日経疏の秘伝を集めたもので、伝存の写本は極めて尠く、「仏書解説大辞典」等未著録。

丙357　同上　延宝二年徳川光圀令写　廿帖
他の義公令写本には各冊全て宥義の跋文が附してあるが、此にはその跋文が全然ない。しかし、義公令写本に附した宥義の跋のみを輯した〔心車鈔跋〕（甲41）にはこの副本の跋文が収めてある。

51 即身成仏義　釈空海撰　康暦元年釈阿観刊〔後印〕　根来版
恵範識語　一冊
本版は根来版としては初期に属し、慶應義塾図書館蔵本等の外に、あまり伝本を聞かない。
（巻末刊記）為報祖徳謹開印板願依白業普利／群生耳于時康暦元年十月六日／願主阿観

50 即身成仏顕得抄　二巻　釈頼瑜撰　〔室町〕写　大永二年恵範識語　二冊

52 即身義愚草（上本―下末（上末重複））　釈頼瑜撰　享禄四年恵範令写　五冊

54 胎蔵界曼荼羅口決　第四外金剛部全　天文十五年恵範令写　一冊

57 胎蔵界和鏡　八巻　明応九年（於醍醐）恵範写　八冊

101 胎蔵界科文　釈叡尊撰　明応九年釈宥宗写　恵範自署　一帖

109 胎蔵曼荼羅口決　二・三（首欠）　永正三年恵範写　（本奥永享五年於上野新田庄書写）　三冊

28 〔大日経〕疏玄関鈔　〔室町〕写　恵範署名　二冊

59 大日経疏愚記（三・五―八・十・十二・十四・十六―十九）　文安元年写（十四―十八、永正十八年恵範令写補配）　十二冊

58 大日経疏愚草（第一の七、第二の五）　釈頼瑜撰　応永五年釈全真写　三冊

61 〔大日経〕大疏愚草（第一の第一―九、第二の第一―六、第三本末）　釈頼瑜撰　享禄四年恵範令写加点　一括

64 大疏百条第三重　第四　釈聖憲撰　〔室町〕写　一冊

65 鎮守講聴鈔　論八・九（尾欠）　〔室町〕写　一冊

8 伝法灌頂記（隆憲記、文明記）　明応九年恵範写　一冊

66 文海雑記（伝法灌頂記録文海）　明応九年恵範写　一冊

67 天台網目鈔抜書　大永八年恵範令写　一冊
68 当流三重大事口決　明応七年恵範写（本云文永七年実融）
一冊
71 入壇雑記（文永二年記道場蓮獄院）　明応十年恵範写　一冊
142 仁王経法　明応十年（於醍醐）恵範令釈宥宗写　一冊
145 如宝愛染次第口決　下（尾欠）　〔室町〕写　一冊
72 薄聞記　下　寛正七年写　一冊
73 般若心経秘鍵聞書　釈吽賀述　寛正五年釈宥実写　一冊
77 秘鍵開蔵鈔　二巻　釈頼瑜撰　明応八年恵範写　二冊
74 秘鈔口決（有欠）　釈教舜撰　明応九年恵範写　廿二冊
存目・一本末・末末・二末・三・五・七・八本末・九本末・十一―十三上・十四上・末・十六・十七本・十七下・十八
75 秘鈔問答（一・三・五・七―十四　十六―十八（有欠））　釈頼瑜撰　大永六年写　十四冊
79 不動法調伏（嘉吉三年）釈隆勝撰　明応十年恵範写　一冊
86 文鏡秘府論六巻　釈空海撰　〔室町〕写　六冊
水色覆表紙（二五・五×十七糎）を附し、厚手楮斐交漉紙を用い、両面書。もと粘葉装。今袋綴に改装。白界、界高二一・八糎。界幅二・三糎。毎半葉六行各行十五字。墨筆訓点四声清濁点を附すること詳細。左の奥書は恵範自筆であるが、本文は他筆。
（第一冊奥書）右此論真言宗文体之亀鏡貴哉吾大師非釈家為棟梁又是儒家奥竈也哀哉為末資而作文不知烏焉馬迷徒狂酔酒肆而不仰三地之遺風耳仍写之矣　恵範五十九
（第五冊奥書）右此論真言宗文体之亀鏡貴哉吾大師唯非釈種霊廟又是孔門之玄関也哀哉其流派未凌波瀾悲之至不如之耳仍写之　土龍　恵範（五十九）
3 遍智院伝法灌頂私記（応長記・遍智院汀私記）　文亀元年恵範写　二冊
69 弁顕密二教論　上　釈空海撰　〔南北朝末室町初〕刊　一冊
毎半葉六行十七字、前掲51「即身成仏義」と同じく、康暦二年に阿観が開板した根来版と思われる。恵範の識語がある。
81 梵網経古迹補忘鈔　六巻（巻二欠）　釈定泉・信空述　長享三年（於讃州聖通寺）恵範写　八冊
82A 梵網経古迹記科分　第二　釈叡尊撰　延徳二年（於東大寺）恵範写　一冊
82B 梵網経古迹記　巻下　新羅釈太賢撰　延徳三年（於東大寺）恵範写　一冊
83 菩提心論愚草　四巻　釈頼瑜撰　大永七年恵範令写　四冊
84 曼荼羅供見聞記（等持寺・武家）・曼荼羅見聞雑記（応安七年）・五壇法見聞記（応安三年）　文亀元年（於醍醐）恵範写（七帖之内）　三冊
85 曼荼羅供記　（安禅寺）釈澄恵撰　永正十二年（於醍醐）写　一冊
107 曼荼羅供記（前承明門院正和二年報恩院）・曼荼羅供記（酉酉応正二年）　〔文亀〕恵範令釈宥宗写　二冊
87 瑜祇経道範鈔　五巻　釈道範撰　応長二年写　明応七年恵範修補識語　五冊

133 瑜祇経疏　第二・三　唐釈金剛撰　〔室町〕写　二冊
88 理趣経口決鈔　第一・五（尾欠）　明応十年恵範令写　二冊
89 律宗羯磨作法　〔室町〕写　一冊
90 律宗新楽略名目　〔室町〕写　一冊
91 臨済録（尾欠）　〔室町〕写　一冊
93 隆憲禅師出家記（宝幢院文海記）（観応二年）釈文海撰　文亀四年実鑒写　文亀四年恵範伝授識語　一冊
甲6 日出辰尅分　永正十三年恵範写　一冊
甲7 四気差・第十四気辰尅分・第十五差四気差辰分　恵範写　一冊
甲8 宣明暦日月蝕私記　永正十三年恵範写　一冊
甲21 見行草　恵範写　一冊
甲37 呂律　恵範写　一冊

以上五部は天文・暦学の書で、密教と天文暦法は関係深いが恵範もその方に造詣の深かったことを示すものである。

丙　聖教類

3 韻鏡聞書　〔室町〕写　一冊

厚手楮紙両面書。扉（元表紙）の右下端に「恵照之」の墨書あり。帰字例反切法を中心とせる漢文体に近い抄物。

4 指微韻鏡之私案　〔室町〕写　一冊

扉（元表紙）は「韻鏡抄出」と題し、右下端に「純智房」と墨書。問答体で漢文体に近い抄物。

043 韻鏡珪玷集　二巻（巻二尾欠）　文禄五年釈文澄写　二冊

破損が甚しい。黄色覆表紙（二五・五×一六・五糎）、但しこの表紙は上冊の後表紙として残るのみ。綴葉装。やゝ厚手楮紙。両面書。表紙右下端に「常楽院宥純」と墨書。字面高さ約二二・五糎。毎半葉十行。上巻内題下に「実尊書」と署す。

（上巻奥書）文禄五年丙申極月廿四日書写之畢保内黒沢慈雲寺末資文澄（生年卅五）

序・序例の問答体の抄。文中「事林広記」等も引く。下巻は「二冬韻」初まで丶、以下欠損。本書は真福寺に慶長十五年書写本あり、その本奥書に「永禄十二年己巳七月廿八日記功訖安養寺実尊」とある。また岡井慎吾博士著「日本漢字学史」によれば、高野山大学図書館にも本写本が存すると。

44 指微韻鏡　〔室町後期〕写　一冊

単辺（二三×二六・五糎）有界八行毎行十八字。朱点朱引墨朱両様の訓点を附す。巻頭「指微韻鏡」と題し、その下に小字を以て「重彫字母指要図韻鑑指微序」と朱書し、行を改めて、通行本の紹興の張序をのせるが、この張序の冒頭、通行本の「読書難字」を、この本は「蓋聞読書難字」に作る小異があるが、大体通行本系である。

23 御請来録私聞書　文安元年写　一冊

綴葉装。厚手楮紙。両面書　巻初に「応永廿九年六月廿二日御請録伝受有之九州明心房発起同聴数在之」と。この講義年

月日は日光輪王寺天海蔵本と同じ。奥書に「文安元年閏六月於高野山谷上宝積院移了」と。

38 三教指帰私記　巻上　釈慶岳講　元亀四年憲識房写　一冊

（奥書）于時元亀肆天八月中旬江戸和光院慶岳上人御房此書御説談之時節如形文字読仕候間前後無弁之間再□ためにに令書之了筆者小松寺之住憲識房居宿藤福寺同学衆廿余人

漢文体に近い抄物。

84 性霊集抄私　序・一・五―十　永禄七年写（序抄）天正廿年写　五冊

綴葉装。厚手楮紙。両面書。白界十行。界高二一・七糎。界幅一・七糎。序は十行。朱勾点四声清濁点を附す。巻一の尾欠丁あり。巻十の奥書に「永禄七林鐘六日書写功畢　雲州之住空印」。序抄は別筆で、扉に「性霊集序私地蔵院」と題し、右下端に「朝純房宥純之」と墨書し、奥書に「天正廿年三月廿三日書写畢於高野山朝純房卅三歳」と。これは真済序のみの抄で、元来別種の両抄を合せたものである。語句の出典の引用を多く標示した漢文体に近い抄である。

309 悉曇抄要文一―四（八巻内）釈安然撰　〔鎌倉〕写　一冊

後補黄色覆表紙（二三・三×一四・五糎）。もと粘葉装。厚手楮紙。両面書。白界、界高一九・五糎、界幅一・八糎。毎半葉六行十八字内外。朱勾点等を附す。尾欠葉あり。

204 梵字形音義　第一　釈明覚撰　〔平安末〕写　一冊

後補黄色表紙（二五×一六糎）。もと粘葉装。楮紙。両面書。白界、界高二一・七糎、界幅一・八糎。朱ヲコト点（円堂点）を附す。我が国悉曇学上重要視される賀州隠者明覚上人著四巻の零本で、現存古鈔本としては天理図書館蔵保安三年写巻四が有名である。この六地蔵本も古さに於て、それ等につぎ、現存古鈔本中尤なるものである。

268 〔暦書〕　長禄四年写　一冊

外題に「大政官符／一応用長慶宣明暦経事」と題し、貞観三年六月十六日の改暦の官符の全文を録し、次に、元慶元年七月廿二日の「応加行暦書廿七巻事」の大政官符（両官符とも「類聚三代格」所収）の全文を録し、この官符の末行の年月日に続けて改行せず左の如く記されている。

（陸奥出羽接察）使源朝臣奉勅依請元慶元七月廿二日延喜一／開元大衍暦注抄春秋両巻復為一巻

立春正月節建寅天道南行宜向南行及宜修造天徳在丁丁上取土及宜避病月殺在刄

用時甲丙庚壬有徳在丙合在辛上取土辛及宜修造月空在壬上取土壬及宜修造三鏡乙辛坤巽艮

この如く具注暦の型が続いで末尾十二月末日に終り、尾題に「長暦」とある。官符の日附の下の「延喜一」の三字は不明であるが、「開元大衍暦注抄」なる書名の「暦注」とは、この官符の冒頭の「暦書廿七巻」の一にあげられた「暦注二巻」（新旧唐書には見えないが、「日本国見在書目録」に著録）に該当するらしく、「立春正月節云々」以下は「開元大衍暦注抄」の本文に該当するのであろうか。この「立春」以下末尾に至

る具注暦の記事は、吉田家旧蔵天理図書館現蔵天文十一年清原宣賢写の「大唐陰陽書」巻卅三上下にほゞ該当する（所掲本がやゝ簡略）。「大唐陰陽書」は新旧唐書藝文志著録の呂才撰「陰陽書五十巻」（新唐書作五十三巻）と推定される佚書で、和漢共に亡佚し、僅かに我が国にこの巻卅三上下が存する。この天理本の卅三上（六月の末）の末尾には「暦注上巻」の尾題を署し、次に三頁の記事があって、「長暦上」という尾題を再び記し、卅三下の尾題は単に「大唐陰陽書巻第卅三」と題する。「長暦」は日本国見在書目録に「長暦四巻」と著録された書に該当するらしく、新唐書に「七政長暦三巻」「大唐長暦一巻」と見えるいずれかに該当するものであろう。要するに「大唐陰陽書」の巻卅三は「暦注二巻」、（或は「長暦」）を収録したもので、暦注は「開元大衍暦注」が具名で、所掲本は行間書入が多いので「開元大衍暦注抄」と称されたのではなかろうか。ここに問題は「暦注」と「長暦」とは同一書か、或はいかなる関係にあるか、両書とも和漢に佚しているので、不明で、後考を期したい。

331 大経要義抄　七巻　釈実範撰　〔平安末〕写　五冊

淡香色表紙（二四×二五・五糎）。粘葉装。厚手楮斐交漉紙。両面書。白界、界高二〇糎、界幅一・五糎。毎行十七乃至十九字。巻二・六の末尾欠丁あり。少しく墨筆訓点を附す。本書は大日経の平安朝の邦人注の代表の一つである。

乙136 同上　延宝二年徳州光圀令写　釈宥密跋　七冊

342 大般若経音義　巻中（尾欠）　〔室町〕写　流布本系　一冊

01 金剛頂瑜伽護摩儀軌　唐釈不空訳　文保二年写　長元十年釈行円・寿保二年・承徳二年本奥書。ヲコト点附　一冊

03 瑜伽瑜祇理供養法　建武二年写　永仁四年本奥書　永正十七年識語　一冊

戊　外典類

1 錦繡投〔抄〕（前半欠）　〔室町後期〕写　一冊

末に「元（寛ヵ）永二年閏八月十日求之水戸俊長（花押）」と。「簡寄　寄令狐郎中　李商隠」より始まり、尾に至る。最も広く行われている月舟の抄とは異るカナ抄。抄者未詳。

2 江都督納言願文集　六巻（巻四欠）　大江匡房撰　〔永享七年〕写　五冊

後補古黒色覆表紙（二四・五×一六・五糎）。字面高さ約二三糎。毎半葉九行各行字数不等。墨筆の訓点四声清濁点を附す。巻一目録題下に「伝領長慶」の墨書あり。巻六末に恵範自筆の本文共紙表紙を綴ぢ合す。本文の筆者は二手。

（巻三奥書）永享七年七月拾弐日　（巻五末）永享七年仲秋廿八日　（巻六末）本云明徳二（マヽ）委辛未十□月廿一日　御本以書写畢鏐天　八代念西

平安朝の大儒匡房の願文集六巻は、従来続群書類従所収の巻三のみの零本が知られるに過ぎなかったが、平泉博士が本書を校刊されて、初めて完本に近い本が世に流布した。所掲本

は天下の孤本と云うべきで、六地蔵本としてはこの本が最も有名である。京都田中家に巻三・六の二冊の古鈔本が蔵されると聞くが、未だ学界に紹介されていない。結局欠巻の巻四は未だ発見されず、伝を失っている。この本の覆表紙の裏打に、公卿の日記を書写した反故紙が使用されている所から、平泉博士はこの本を繕装したのは義公かと推定された。義公でないとしても、彰考館関係者であったことは明かである。（同様の反故紙が丙268〔暦書〕の表紙裏打にも使用）

3 実名字　天文七年写　名乗りに関する書　一冊

4 倭漢朗詠集私注　六巻（巻一・二欠）　釈信阿撰　天文十八年写　二冊

後補淡褐色表紙（二六・九×一七・七糎）、単辺（一九×一四・五糎）有界七行各行十七字注小字雙行十九字内外。上層幅三・五糎。墨筆訓点を附す。

（上冊奥書）天文十八年己酉九月廿二日書之憲雄形見云々　八泉薬師堂ニテ佐竹江戸忿劇故陳屋ノ体哀哉云々

宥哲法印様助筆被下候御厚恩難報奉存知候

（下奥書）天文十八年己酉霜月十二日書之畢憲雄形見云々

宥哲師匠法印様所々仁助筆被下候過当之至奉存知候

5 王沢不渇鈔　二巻　釈良季撰　元和元年写　二冊

淡香色覆表紙（二七×二〇糎）字面高さ約二三糎。毎半葉八行内外。上巻元表紙右下端に「桑門春長之」と墨書。下の書写奥書に「元和元年三月十二日以五二才之時分候六□書之」。本書は平安末に成立した諷誦・願文・表白等の作文指導書。

6 大広益会玉篇　三〇巻　梁顧野王撰宋陳澎年等重修　慶長九年釈宗鈍刊　覆元至正廿五年南山書院刊本　元和三年釈宥長感得識語　五冊

7 聚分韻略　釈虎関師錬撰　元和三年写　二冊

（上奥書）元和三年丁巳六月十七日　六蔵寺腋坊／生年廿三ノ時分ナリ

（下奥書）元和三年丁巳六月拾七日六蔵寺ワキ時にて書置ス

六蔵寺腋坊□／生年廿三ノ時分ナリ

8 論語〔集解〕一〇巻　魏何晏集解　〔室町後期〕写　二冊

淡褐色表紙（二五・四×一七糎）。単辺（二〇・八×一四・七糎）有界九行各行廿字注小字雙行。朱点朱引墨訓点四声清濁点を附し、振仮名は詳細。眉上所々書入注あり。各尾題下経注字数あり。訓点は室町期の仏家系のそれ。各冊尾に「元和六年ノ酉十月求是　六蔵寺常住」（常住の字の左右に松岩・宥長の墨書）の感得識語あり。各巻尾に「一生風前云々」なる意味の判じ難い、本文同筆の思われる識語があり、下冊には「永正十四□」の年記が見られる。書写はその頃か。

19 論語〔集解〕巻一―四　魏何晏集解　〔室町末〕写　合一冊

濃褐色表紙（二五・三×一八・三糎）。単辺（二〇×一五・三糎）有界七行各行十七字、注小字雙行。

朱点朱引墨訓点を附す。扉（本文共紙本表紙）の右下端に「見意」の墨書あり。扉の裏の左下端に「主御勝丸」の署名

あり。各篇題下に室町写本論語集解に往々見る如き論語義疏の竄入文あり。訓点は室町期の仏家流、訓点に濁点多し。

10 論語〔集解〕巻九・十　魏何晏集解　寛永三年写　一冊

渋引褐色表紙（二五×一八・二糎）。表紙の右下端に「主御勝丸」の墨書あり。単辺（二〇・三×一四・九糎）有界七行各行廿三字内外。注小字雙行。尾題下経注字数あり。朱引墨訓点を附し、振仮名は詳細で、本写本の異例なのは、「孔安国」を「孔アン国」と記す如く、漢字をカナにて表記する所が多い。左の書写奥書を有する。

（巻九尾）寛永三年寅ノ三月十日書之勝（花押）舜長之

（巻十尾）寛永三年寅ノ三月十五日六反田村書畢

さかもり花見之時分書申候あめふりとせん之まゝ書終也

俊長卅三之時分也

9 論語〔抄〕十巻（公冶長五―泰伯九欠）　元和十年釈俊長写

四冊

淡香色表紙（二六・五×一八糎）。字面高さ約二五糎。毎半葉十二行。何晏序の抄が「論語序之事」と題して、末尾に附してある。奥書左の如し。

（第一冊）（為政）五月六日ヨリ書初而八日ニ畢／元和十年後五月八日六院内ニ而是書之あわれ〳〵

（里仁）元和十年閏五月十四日六蔵寺院内俊長（花押）

（第二冊）（郷党）元和十年子ノ六月十二日風サヒシキ時分書畢六蔵寺俊長

（顔淵）元和十年子ノ六月九日六蔵寺院内是書俊長（花押）

（第三冊）（子路）元和十年子ノ五月廿三日六蔵寺院内ニテ書畢俊長（花押）

（李氏）第十五ヨリ第十六巻畢五月廿七日六蔵寺院内ニテ書畢俊長（花押）

（第四冊）（微子）五月廿八日六蔵寺院内俊長

（巻末）此本ハ元和七年辛酉卯月廿五日於長谷寺客坊ミナトテニ和田玄法印書取ヲ借申而求（カ）此　元和十年子ノ五月卅九（ミソ）日六蔵寺院内水戸俊長（花押）

本書は他に類似本を見ない論語仮名抄で、内容から見て仏家の講説である。

12 周易（上下経）六巻（巻一・二欠）　魏王弼注　〔近世初〕写　四冊

雲母引淡灰色表紙（三〇・五×二〇・四糎）。単辺（二四・三×一六・八糎）有界七行各行十六字注小字雙行。上層幅三・八糎。墨筆訓点を附す。尾題下経注字数あり。

14 三体家法詩巻一（絶句体）　宋周弼編　〔室町末近世初〕写　一冊

渋引緑色表紙（二二・五×一六・三糎）。字面高さ約一七・五糎。毎半葉七行。少しく朱点朱引を加え、墨訓点を附す。

15 長恨歌并序　唐白居易撰　闕名者注　〔室町末近世初〕写　一冊

丁字色表紙（二五・三×一七糎）。空界七行、界高二〇糎、界幅二糎。注小字雙行。墨訓点を附す。

18 老子道徳経二巻（河上公章句本）〔室町末近世初〕写　一冊
縹色覆表紙（二三×一五糎）。字面高さ約一八・五糎。毎半葉七行各行十四字。朱ヲコト点（明経点）を附す。元表紙外題下に「孝賢之」「六蔵寺」「仏陀院」の墨書。

20 和漢朗詠集私注　注者未詳　〔近世初〕写　二冊
濃褐色表紙（二六・六×一八・三糎）。字面高さ約二一糎。毎半葉十八行。信阿の序あれど、信阿の私注ではない。漢詩のみの片カナ注である。

21 碣石調幽蘭第五・琴左右手法・琴手法図・調琴法　荻生徂徠編校　写　一冊
碣石調幽蘭は陳の丘公明撰と言われ、佚存書。京都西加茂神光院の唐鈔本が知られている。

25 琴譜　安永九年立原翠軒写並跋　折本一帖

26 萬峯閣指法閲箋　清徐珙撰　立原翠軒写　一冊

己　恵範関係巻子本類

1 三摩耶戒儀式　文亀元年恵範写　応永廿五年釈隆源本奥書
一巻

2 光台院伝法灌頂雑記（応安五卯七堂上）　〔室町〕写　恵範四十五歳感得識語　一巻

3 金剛頂瑜伽経　巻三　応永廿四年大伝法院恵淳刊　天文四年恵範識語　永禄四年宥海朱墨加点　一巻

4 妙法蓮華経　八巻　〔寛正二年藤林居士〕刊　天文三年恵範識語　釈宥清施入　八巻
庚17 無量義経　寛正二年藤林居士刊　一巻
庚56 観普賢経　寛正二年藤林居士刊　一巻
以上三部の法華開結二巻一具は、天地に銅金界（界高二二糎）を施し、無量義経・観普賢経には巻末にそれぞれ開板者藤林居士の刊語を有する。

5 伝法灌頂雑記　上（三巻内）　釈頼然撰　〔室町〕写　恵範識語　二巻

6 小巻物（附法印可之様佐久方）・（六地蔵寺法系文書）　室町末―文政元年写（書き継ぎ）　一巻

7 古過去帳　〔室町―近世初〕写　一帖
群書類従所収の「六地蔵寺過去帳」の原本で、今糊ばなれがして、ばらばらになっているが、近く修複の予定。この原本と比較すると、類従本には少しく誤刻が見られ、もれている箇所もある。

8 弘法大師行状図画　十巻　天文十五年写　絵巻　十巻
紙本著色。紙高三〇糎。巻一の巻末の奥書に
右為酬高祖恩徳兼又為令遂先師法印恵範求願宿望／誂鹿野弥次郎十軸綵絵摸写畢仮名詞恵潤書写之／于時天文十五丙午春日書写功畢／同十六丁未五月九日付軸畢／本願沙門恵潤四十一才／助衆一結門葉／細工快伝房宥伝／軸寄進後藤大炊助／料紙取持出沢式部少輔
とあるのをはじめ、各巻末にほゞ同趣旨の奥書を有する。そ

のうち巻五のそれは小異があり、左の如し。

于時天文十五年歳次丙午首夏四日午尅於藤福寺仮名詞書写／功畢是偏為酬高祖恩徳且又為先師恵範法印求願修幽魂照覧也而已／同九月七日一交――／同十六丁未五月九日付軸畢／本願沙門恵潤四十一歳／助成一結門葉結縁緇素自信／取持並細工快伝房宥伝／絵師鹿野弥次郎／軸取持檀那後藤大炊助／料紙取持願主出沢式部少輔

即ち、恵範の弟子たる六地蔵寺第四世住恵潤が願主となって先師恵範の追善供養の為めに、恵潤自ら詞書を写し、一門緇素の力を結集して天文十五年の春から翌年夏にわたって調進した絵巻である。

弘法大師の行状記の中、仮名書の絵巻として知られるのは南北朝期の書写にかかる東寺所蔵「弘法大師行状記」十二巻、高野山地蔵院蔵「高野大師行状図画」六巻と、文禄五年に高野山で開版された「高野大師行状図画」十巻である。掲出本の分巻・段落の組織は、文禄版と全く一致し、詞書や挿絵にも類似が多い。この絵巻が文禄版の祖本の系統に属すると明確には言い得ないが、文禄以前の年記を有する点において、注目すべき資料である。

9 六蔵寺系図　〔江戸前期〕写　一巻

10 〔書名未詳〕（首欠）　釈俊慶撰　明応六年恵範写　一巻

11 成唯識論　十巻　〔室町〕写　恵範自署　十巻

12 〔伝法灌頂次第永和二年十二月廿三日〕（首欠）　釈祐盛撰　明応五年恵範写　一巻

庚　巻子本類

1 遍照発揮性霊集　続共十巻　釈空海撰　釈真済編（続）釈済遍編　正嘉二年釈快賢刊（続）建治三年釈慶賀刊　高野版　十巻

高野版特有の淡香色地表紙。紙高二八・五糎。料紙は厚手の楮高野紙。外題の下に「六蔵寺」と墨書。巻一首尾、巻三尾、巻七尾、巻八首に各々一乃至二張の欠張がある。印面高さ二三・五糎。毎行一四字。朱引、黒筆の訓点四声清濁点、別筆の朱の振仮名、声点を附すること詳細にして、行間紙背に書入注が多い。巻末の刊記次の如し。

（巻一）酬四恩之広徳興三宝之妙道者／是吾願也云云因茲忝御高祖之／遺誡敬開製作之摸範而已／　正嘉二年戊午十月之日高野山仏子快賢

（巻二・五）酬四恩之広徳興三宝之妙道此吾／願也云云仍勧与力於十方開模範／於万代而已／正嘉二年戊午十二月之日勧進高野山快賢

（巻八・九・十）為報仏恩酬祖徳謹開印板伝之／来葉矣／建治三年正月　日仏子慶賢（巻九・正月作十一月　巻十・正月作十二月）

巻末に室町期の筆で「権少僧都宥清」の墨書を有し、巻十の首題下に「佐久山末弟性惣」なる朱書があり、巻一の巻末に左の朱筆識語が存する（この識語を記した紙片は離れて別巻

に添えてあったが、恐らく巻一末にあったと推定される)。

永享十年四月十三日夜寅時之半点畢／常州佐久山性惣坊

仰願両部諸尊宥尊法印仏子宥全生生／値遇仏法興行利他有情同証仏果し給へ

印面が所々やゝ磨滅している所があり、摺刷は南北朝前期頃に下ると思われる。訓点・書入はほゞ二手で、訓点の朱筆、墨筆の一手の方が後である。後のが恐らく上記の朱筆識語の佐久山性惣房が永享十年に加点書入したものであろう。書入も墨筆の一手は古く、南北朝から室町初にかけてのものと思われる。此等書入は経・史・子の各種の漢籍や文選等及び国書を引いて、出典をあげて注し、説文・玉篇・礼部韻略等を以て音義を下し、振仮名には所々四声濁点も加え、間々校合注(多くは朱筆)も存する。引用の国書には一ケ所職源抄が引かれ、その筆跡は二手のうち若書きの方に属するようである。この正嘉・建治の高野板性霊集は、十巻完具の存在は稀れで、本六蔵寺本は詳細な訓点・書入を有する点と相まって貴重視すべきである。

3 常州那珂郡石神村正覚山法蔵寺縁起 (弘安十年十月十五日)

釈朝恵撰 〔室町〕写 一巻

5 妙法蓮華経 八巻 貞治四年臨川寺釈東岡希杲刊 八巻

各巻初に図像の扉絵を有し、天地に銅金界を施けてあるが、大部分腐蝕して、界外の紙がきれている。各尾題後に音義図像木記を附す。宋版或は元版の覆刻である。巻八末に左の刊語と成就功徳尊天・十羅刹女等の図像が刻されている。

是出相之経此方未有開板者也誦習之便莫過於是今寓臨川東岡杲侍者以故謄写募刊功已畢矣所獲功徳奉為前住上州路大福禅寺雪嶺存和尚増崇品位専禱募者施者随喜而賛成者聞者見者読誦而受持者何待繫珠早顕理性之常在不労鑿井能明示悟之多方所謂現瑞放光永祝 一人之叡算出定揚徳斎資三有之善根者 貞治乙巳五月一日玉泉周皓謹記

即ち臨泉寺の東岡希杲が雪嶺希存和尚の増崇品位の為めに、願主となって貞治四年刊行したものである。希杲は出版事業に尽力した僧で、その幹縁となった刊行書には「禅林類聚」その他がある。五山版中、かゝる巻子装の摺経供養は珍しく、またこの貞治刊法華経は現存するもの、嘗て川瀬一馬氏が発見した吉野の龍門文庫の外所在を聞かない。巻末に左の墨書の施入識語がある。

奉施入法華妙典一部／悲母尊霊頓証仏果／大永五年乙酉六月十六日 施主敬白

33 金翅鳥 乾元二年写 一巻

正安四年本奥書。ヲコト点(円堂点)を附す。

97 普遍光明清浄熾盛如意宝印心無能勝大明王大随求陀羅尼経

二巻 唐釈不空訳 〔平安後期〕写 二巻

紙高二六・七糎。界高二〇・二糎、界幅二糎。毎行十七字。朱ヲコト点(中院僧正点)、少しく墨筆の送仮名を附す。下巻初一葉を欠く。巻尾に、「天正廿年壬辰五月廿日 宥応為結

縁奉読誦候」なる誦読識語を有する。本経は本経蔵の古写経中の白眉と言ってよい。

癸　刊本類

6 翻訳名義集　零巻　宋釈法雲撰　〔室町初〕刊　一冊
印面麗しい五山版であるが、零葉の集合となっている。

8 華厳一乗教分記　三巻　唐釈法蔵撰　〔鎌倉〕刊　三冊
粘葉装。糊がはがればら〳〵となって、欠丁が多い。厚手斐紙。印面高さ二〇・七糎。毎半葉七行十八字。「寧楽刊経史」には、弘安六年沙門禅爾刊本を著録するが、この掲出本とは款行が合致しない。この本は印面極めて麗しく、版式は鎌倉時代の寧楽版の典型を示し、恐らく弘安頃南都で開板されたものであろう。

10 般若心経秘鍵　釈空海撰　〔室町〕刊　高野版　一冊

11 弁顕密二教論　二巻　釈空海撰　〔室町〕刊　高野版　二冊

54 隆興仏教編年通論　二八巻　宋釈祖琇撰　〔南北朝〕釈宗応刊　五山版　釈竺雲等連書入本　十冊
縹色表紙（二八・八×二二・五糎）。左右雙辺（二一・四×一四・八糎）有界十一行、各行二一字。版心、白口、「編巻幾（丁数）」。目次の次に「刊頭法眼宗応助雕此目録一巻并御制七紙」の刊記を有する。この法眼宗応の名は貞治三年刊「五燈会元」の刊記に「洛南建仁霊洞法印宗応刊行」と見える。即ち、この五山版も建仁寺の宗応が関与した開板で、刊行年も貞治年間頃と推定してよい。本書の五山版には、やはり南北朝刊の雙辺無界の別板がある。共に文字の筆劃が相似し、同一の宋版に基く覆刻であろう。
所掲本は朱点朱引、墨訓点が附され、眉上行間に亘り、また附箋や新に紙を綴ぢ合せする等して、極めて詳細な書入が施されている。各冊に「竺雲」の朱印が捺され、巻十四の尾題下に次の細字の識語がある。
永享八年丙辰菊節点句読了重艮叟五十□歳在恵林院是歳三月八日退相国之席
即ち、蔵書印とこの識語からこの書入をなしたのは竺雲等連たることが判明する。竺雲名は等連、漢書蘇詩の講で有名な太岳周崇に学び、応永年間入明求法し、帰朝後、永享七年八月十一日相国寺四十世に視篆した（この識語の年月日に吻合す）。恵林院はその師太岳の開いた相国寺の塔頭である。竺雲は易学と漢書に精しく、師説を受けて漢書に和点を附し、好んで史記漢書を講じたので、当時叢林の間に「等連漢書」と喧伝された。しかしその詩文集や漢書の点本が佚した現在では、多く史書を引くこと詳なる、博引傍捜のこの書入は竺雲の学識を察する上からも、極めて貴重な存在と言わねばならぬ。かゝる由緒ある五山版が如何なる経路を辿って本法宝蔵に架されるに至ったのかは興味がある。

56 大毗盧遮那成仏経疏　二〇巻（巻一欠）　建治三年―弘安二年刊　高野版　一括

粘葉装。高野板特有の縹色元表紙も残す。糊ばなれしてばらばらになり、各巻欠丁が多い。巻三―七に建治三年、巻十一に同四年、巻十二・十四・十五・十七に弘安元年、巻十七に弘安二年の金剛峯寺信藝書の刊記を有し、毎冊末に「宥覚」の墨筆自署がある。野山の名筆と言われた信藝が版下を書き、建治三年から弘安二年にかけ秋田城介泰盛が開板した高野版で、比較的摺刷のよいものと少しく後刷のとが交っていて、室町初頃の朱墨筆の訓点書入がある。本経蔵に別に巻二の巻尾一葉と淡香色地の後表紙の零葉（癸74）が存する。その後表紙見返しに「応永廿二年乙未六月一日／大伝法印恵淳」の刊記を有し、「六蔵寺宥海」の墨書、また「天文甲寅於根来寺求得畢」の感得識語がある。この版は建治弘安板とも異る。応永年間根来の恵淳が三部秘経を開印したことは従来知られていたが、これを以て大日経疏も出版したことが判明する。

57 大毗盧遮那成仏経疏　二〇巻　〔近世初〕刊　高野版　一括

粘葉装が糊ばなれして、ばらばらになり、各巻欠丁が多い。前掲の秋田城介開板本とは別板であるが、不完全な覆刻の関係にある。大日経疏は秋田城介開板以来、需要が多いだけに室町末まで多年頻繁に摺刷が続けられた。従って大日経疏の高野版には幾種類あるか未だ判明していない。秋田城介開板の旧板木を遞修に遞修を重ねて使用し続けたあげく、終には旧板木を残さぬ別板に変化して行ったと思われる。

62 金剛頂経開題　零巻　釈空海撰　〔鎌倉〕刊　高野版　六行十七字　一冊

63 秘密曼荼羅教付法伝　零巻　釈空海撰　弘安二年刊　高野版　一冊

（刊記）弘安二年己卯仲秋候為紹隆密教自書開印板矣　権少僧都能海

元徳二年移点、永享二年感得の識語あり。

64 大毗盧遮那経供養次第法疏　二巻　唐釈不可思議撰　弘安三年刊　高野版　二冊

七行十七字。欠丁が多い。やゝ後刷。下巻の刊記に

弘安二年十二月五日於金剛峯寺信藝書

為続三宝之慧命於三会之出世広施一善利益於一切之衆生是則守大師之遺誡偸令遂小臣之心願謹以開板矣

弘安三年庚辰七月　日　従五位上行秋田城介藤原朝臣泰盛

65 即身成仏義　零巻　釈空海撰　〔室町〕刊　高野版　一冊

67 吽字義　零巻　釈空海撰　〔室町〕刊　高野版　一冊

68 声字実相義　零巻　釈空海撰　〔室町〕刊　高野版　一冊

71 妙法蓮華経　八巻　〔室町〕刊　金界小型　八巻

72 大毗盧遮那成仏神変加持経　巻一（零葉）　元和三年高野成慶院刊　二葉

首尾の二葉のみ。七行十七字。左の刊記と寛永三年の俊長の識語あり。

元和三年仲冬良辰於高野山蓮花谷／成慶院開板焉

73 金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論　〔室町末近世初〕
刊　二葉

左の刊記を有する六行十七字の高野版の零葉である。

為奉報祖師広恩開此菩提心論印板耳　檀主生国阿州爲順

丙191 少室六門　旧題梁菩提達磨撰　〔鎌倉末南北朝初〕刊　五山版　一冊

淡香色表紙（二〇・四×一六・七糎）。表紙裏張りに春日版摺経を使用。単辺（一九×一二・五糎）無界十行各行二十字。版心、白口、「（門略名）（丁数）」。末尾に欠丁がある、即ち第六門血脉篇の終末に近い「心行処滅見聞覚知本」に止り、以下数行を欠く。恐らく半葉を欠脱したものであろう。

本書は禅宗の基本宗典の一つであるから、五山版で当然開板されてしかるべきであるが、従来五山版の存在を知られていなかった。こゝに新出の五山版を紹介し得ることを喜ぶ。所掲本は虫害汚損甚しいが、かなり精巧な宋版の覆刻で、刊年は南北朝初を下らぬものと推定する。

（昭和四十二年五月稿）

附記

上記の如く、六地蔵寺法宝蔵本は破損が甚しいので、目下修理を計画中であるから、補修完了まで、閲覧を御遠慮願うことになった。六地蔵寺としては、近い将来準備態勢を整えて、篤学者の要望に応える予定である。蔵書の一部については、慶応義塾大学附属研究所斯道文庫及び東京大学史料編纂所にマイクロフィルムの副本があるから、お急ぎの研究者は、当分それを利用して頂きたい。